

主 は、生きておられる

Unser HERR lebt

2025 **65**
graph magazine vol.

Unser
HERR
lebt

Unser
HERR
lebt
主は生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。(ヨハネ3・3)

vol. **65** 定価100円(税込み)

Unser
HERR
lebt
主は、生きておられる

主は、生きておられる
Unser HERR lebt

メッセージ

- 4 イエス様の証し(2) ゴットホルド・ベック
- 17 主イエスさまこそ私たちが必要としているすべてです
藤田 瑛二^{えいじ}

7人の証し

- 25 一步一步の信仰の歩み 山口 裕之
- 35 イエスは わがいのち 内田 玲子
- 48 救われたのはただ神の恵みによるのです 後藤 寛
- 59 苦難の日にわたしを呼び求めよ 柳奥 洋子
- 69 主があなたとともにおられる 中谷 光枝
- 77 ここまで主が導いてくださった 古畑 晶
- 85 イエス・キリスト、真理と喜びの道 古畑 陽子

イエス様の証し(2)

ゴットホルド・ベック

しかし、ほかの人には決してついて行きません。かえって、その人から逃げ出します。その人たちの声を知らないからです。」イエスはこのたとえを彼らにお話しになったが、彼らは、イエスの話されたことが何のことかよくわからなかった。

そこで、イエスはまた言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしは羊の門です。わたしの前に来た者はみな、盗人で強盗です。羊は彼らの言うことを聞かなかったのです。わたしは門です。だれでも、わたしを通過してはいるなら、救われます。また安らかに出入りし、牧草を見つけます。盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを

豊かに持つためです。わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。

(ヨハネ 10・5～11)

それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同様です。また、わたしは羊のためにわたしのいのちを捨てます。わたしにはまた、この囲いに属さないほかの羊があります。わたしはそれをも導かなければなりません。彼らはわたしの声に聞き従い、一つの群れ、ひとりの牧者となるのです。

わたしが自分のいのちを再び得るために自分のいのちを捨てるからこそ、父はわたしを愛してくださいます。だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わ

たしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです。

(ヨハネ 10・15～18)

イエスは彼らに答えられた。「わたしは話しました。しかし、あなたがたは信じないのです。わたしが父の御名によって行なうわざが、わたしについて証言しています。しかし、あなたがたは信じません。それは、あなたがたがわたしの羊に属していないからです。わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。

わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。わたしと父とは一つです。」

ユダヤ人たちは、イエスを石打ちにしようとして、また石を取り上げた。

(ヨハネ 10・25～31)

しかし、もし行なっているなら、たといわたしの言うことが信じられなくても、わざを信用しなさい。それは、父がわたしにおられ、わたしが父に在ることを、あなたがたが悟り、また知るためです。」(ヨハネ 10・38)

前回に引き続き、主イエス様ご自身のなさった証しについて一緒に考えたいと思います。私たち人間が主イエス様を証しすることが出来るのは、もちろん幸いなことです。イエス様に出会った人々は、喜んで証ししたいと思うようになります。証しをするとは、イエス様を紹介することです。もし、誰もイエス様を紹介する人がいなかったなら、私たちは果たして救われたかどうかわかりません。どうしようもない人間の証しを用いて、主は人々に出会うことをなされています。

けれども、人間だけではなく、イエス様ご自身も証し

してくださいました。それは冒頭のみことばを読んで
もわかります。第一に、イエス様ご自身についての証し
をみて、第二に、ご自身に属する羊についてイエス様が
なさった証しを見てみましょう。

1. ご自身についての証し

イエス様は「わたしは良い牧者です」(ヨハネ10・11)と証
しされました。このように言われるのは、雇い人もいる
からです。雇い人は羊たちよりも自分の利益を大事に
する偽者です。イエス様はご自分が本物で、唯一の良い
牧者であり、ご自分が旧約聖書で約束されたメシヤで
あることを、はっきり主張してくださいました。イスラ
エルの民は旧約聖書を通して、来るべき救い主は迷え
る羊のことを心の底から心配してくださいださる良い羊飼
いであることを確信していました。

ダビデは、この救い主である神を体験した人物でし
た。彼は自分の犯した取り返しのない深い罪を、徹

底的に明らかにされることによって、自分が赦された
ことを確信するようになりました。その結果として、
「主は私の羊飼い。私は乏しいことがあります。」(詩篇
23・1)と心から喜び、安心してこの良い牧者にすべて
をゆだねることができたのです。詩篇23篇は、詩篇の中
で最もよく知られ愛されている一篇ではないでしょう
か。ところが、聖書の他のみことばほどには信仰をもっ
て受け留められていないように思われます。いったい
誰がこのことを心の底から信じているのでしょうか。

「主は私の羊飼い」と証しする人は、同時に、「私は、何
の助けも持たない愚かで無力な羊にすぎません」と、証
しせざるを得ない者だと言えるでしょう。自分自身の
みじめさを十分知っている人こそが、良い羊飼いのと
ころに来て、すべてを牧者なる主にゆだねることができ
るのではないかと思います。

良い羊飼いは、徹頭徹尾、自分を無にして、羊の世話
だけを考えます。良い牧者である主は、赦してくださいださる

お方であり、また与えるお方です。

二つ目に「わたしは門です」とイエス様は言われまし
た。イエス様は盗人でもないし、嘘つきでもありません。
主よりも前に来た者たちは、盗むため、殺すためにやっ
て来ましたが、イエス様は羊を守るため、救うため、解
放し、そして力づけるために来られました。「わたしは門
です」ということばで、「わたしによって羊は守られ、保
護と安全が約束されている」ということを示されたの
です。

イエス様は、なぜ良い牧者であり、また門だとおつ
しやられたのでしょうか。それは、羊たちのためにご自
身の命を捨てるからです。つまり、「わたしは人間の債
務と罪のために身代わりとして死にます。わたしが死
ぬのは、人間の罪に対する裁きを受けるためです。し
かしわたしは、罪の贖いと赦しのためだけに死ぬので
はなく、わたしの命を彼らに与えるためにも死ぬので
す。わたしは、羊たちが、わたしの命を自分のものとす

ることができるよう、わたしの命を捨てます」とおつ
しやっているのです。良い牧者の近くで生活する者に、
必要な糧を備えてくださり、病気の時は看病し、誘
惑から守り、そしてさらに多くの保護と安全を保障し
てくださいます。

三つ目の証しとしてイエス様は、「わたしは父(創造
主)の息子である」と言われました。ところがそれを聞
いた当時の多くの宗教指導者たちは、憤り、イエスを殺
すべきだと思ようになりました。

確かに、イエス様のように言明した人間は一人もい
ません。イエス様は「わたしだけが、良い牧者であり、た
だ、わたしのもとにのみ本当の満足がある。また、わた
しだけが羊の門であり、わたしを通らなければ、誰一人
父のもとへ行くことはできない。救われることができ
ない。そしてわたしだけが、父と一つになっている者で
ある。わたしは、永遠に生きている神である。」と言われ
たのです。イエス様のこのことばが真理であるという
ことは、イエス様の復活によって証明されました。また

イエス様の証し(2)

私たち信者一人一人の存在も、その真理を証明していると言えるのではないのでしょうか。

2. ご自身に属する羊についての証し

これまで見たように、イエス様はまず、ご自身について証しされましたが、それだけではなく、ご自分の羊たちについても、証ししておられます。「わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます」(ヨハネ10・27)。つまり、「わたしはわたしの羊たちによってよく知られており、わたしも彼らを良く知っており、わたしの羊たちは、わたしに従う」と仰おこっているのです。

ところで、そもそも羊というものは、愚かな性質を持った動物です。ある一匹の羊が川の流れに入って溺れてしまうと、その後ろに続いている群れ全体が同じことを行ない、同じ運命に遭あいます。羊飼いのいない羊は、道に迷いどうすることもできない状態に置かれま

す。守ってくれる者もなく、完全に助けのない存在です。そして、聖書は、人間をその羊に例えているのです。人間は寄るべのない羊のようなものであるとイザヤ書53章6節に記してあります。

私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かつて行った。しかし、主は、私たちのすべての咎とがを彼に負わせた。(イザヤ 53・6)

人間は、自分がなぜ生まれたのか、人生にどんな意味があるのか、死後はいつたいどうなるのかということを知りません。つまり、人間は愚かな羊と全く似たようなものです。羊はどこまでも羊であり、羊にとどまるしがなく、突然、熊になったりライオンや蛇になったりすることはできません。そして人間もまた、どこまでも人間であり、寄るべのない状態にとどまるのです。

聖書には、「人の心は何よりも陰険で、それは直らない」(エレミヤ17・9)と約二千七百年前に、エレミヤによっ

て書かれています。もし私たちが、自分の力に頼るなら、死ぬまでその状態から全く変わることができず、陰険で直らない性質のままです。これは、主なる神様のことばです。でも、もしそのような人間がひとたび良い牧者と結びつくなら、もはや迷ったり空しく何かを探し求めたりすることはなくなります。ただし、依然として羊のように、助けと導きを必要としますが、主イエス様の御手の中で守られていることを知っています。それではいったい誰が、このように主に属する羊と言えるのでしょうか。その特徴を考えてみましょう。

(1) 主の御声を聞く者

ペテロは次のように書いています。

あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。(1ペテロ 2・25)

イエス様の証し(2)

私たちは、主の御声を聞くことがどうしても必要です。主の御声を聞く者は、慎重になり、何かがあってもすぐに主に立ち返ります。その人は悔い改め、謙虚になってイエス様のみもとに行き、そしてイエス様に受け入れられます。

聖書の中心になるものとは何なのでしょう。最もひどい罪は「信じない」ことです。ヨハネの福音書5章24節はよく引用されます。

まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣つかわした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。(ヨハネ 5・24)

「信じる者」は「持ち」とあります。確かに「聞く」ということは、信じることを意味し、「信じる」ということは、「永遠のいのちを持つ」ことを意味します。イエス様の声を聞くことは、イエス様の御声を知ることにより

ません。それによって、主ご自身を知ることになるので、冒頭に示したヨハネの福音書10章5節にはこうあります。

しかし、(主の羊は)ほかの人には決してついて行きません。かえって、その人から逃げ出します。その人たちの声を知らないからです。
(ヨハネ 10・5)

これこそが大切です。信じる決心をするということ、で充分なのではありません。罪から離れても充分ではありません。もつと善い人になりたいと思うことでも、もちろん充分ではないのです。大切なことは、私たちが主イエス様を、個人的に知るかどうかということです。そして私たちが、主の御声を真剣に聞いたかどうかということです。

「主の御声を聞く」とは、実践的な意味を持っています。イエス様のみことばを真剣に受け留め、自分のものにすることを意味するのです。

信じる者のことを知っておられるということは、大きな慰めです。イエス様は、人間一人ひとりが抱えている、さまざまな戦いを知っておられます。イエス様は、私たちのいろいろな失望もご存知です。イエス様は、あらゆる人々のすべての問題を知っておられますが、ただ単に、私たちを知っておられるというだけではなく、また、すべての事をご存知であられるというだけではありません。イエス様は一人ひとりのために、全く個人的にご臨在しておられる良い牧者なのです。

しかし一方で、非常に厳しいことばの一つが、マタイの福音書7章に書かれています。

わたしに向かって、「主よ、主よ。」と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。その日には、大ぜい(少なければありますが)の者がわたしに言うでしょう。「主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言(預言とはみことばを宣べ伝えることです)をし、あなたの名に

イエス様は、悩んで困り果てて主のもとにきた人々に、「安心しなさい。あなたの罪は赦されました」と、しばしば言われました。このイエス様のことばを聞いた人々は、喜びにあふれたことでしょう。

もしかすると、心碎かれイエス様のみもとに来て恵みを切に求める人であっても、自分の罪が赦されたということは、よく理解できないかもしれません。けれども、信じることはできます。「罪人(つみびと)」としてイエス様のみもとにきた者は罪が赦される。」ということ、は、誰にも否定できないすばらしい事実です。ですから、自分の債務をイエス様に打ち明け、イエス様はあなたを赦してくださったということを、幼子のように信じてください。

(2) 主のみこころを行なう者

イエス様はご自分に属する羊たちについて「わたしはわたしのものを知っています。また、わたしのものは、わたしを知っています。」と言われました。イエス様が私たち

よって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。」しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。「わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。」

(マタイ 7・21-23)

ここには、イエス様の恐ろしい判断が示されています。「わたしはあなたがたを全然知らない」と。人はイエス様の名によって、預言をすること、悪霊を追い出すこと、またイエス様の名を使って奇跡を行なうこともできます。ところが、これらの事は、イエス様と結びついていなくてもできるのです。肝心なこと、救われていることの特徴は、「主の御心」を行なうことなのです。

「わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいる」とイエス様は言われました。そして、「わたしはわたしのものを知っています。また、わたしのものは、わたしを知っています。」と証しされました。

イエス様の証し(2)

このことこそが大切なのではないでしょうか。イエス様は、「わたしの羊はキリスト教の教えを知っている」とは言わなかったのです。「わたしのものは、わたしを知っています」と言われました。イエス様が「良い牧者」であるということを知っているだけでは充分ではありません。イエス様は「私の牧者」である、と誰もが強く信じて疑わないようにならなければいけないのです。「主は私の牧者ですから、私には乏しいことがない」というのは、「イエス様が私を伴われ、私を導かれ、私を力づけ、私と共におられます」という証しです。

(3)主に従う者

「私は主を信じている」と言いながら、日常生活の中で、主に従っている様子がまったく見えない人が、確かにいるようです。しかしイエス様は、「自分の羊たちについて「彼らはわたしに従います」と言われたのです。イエス様について行くということは、主に従うことを意味しています。主について行くことが赦されているという

かりません。どうか、私を導いてください。私はあなたについていきたいです」と。このようにパウロが変わったのは、考えられない奇跡です。イエス様との出会いによって、彼は、自分が愚かな羊であり、良い牧者の導きが必要とされているということを知りました。主は「私の良い牧者である」と確信できる人は、本当に幸せなのではないでしょうか。

ここまで私たちは、イエス様がご自身についてなさった証しと、ご自身の羊たちについての証しを考えました。

すなわち第一に、「わたしは、雇い人ではなく、唯一の良い牧者です。わたしは、盗人ではなく、門であり、わたしのものには安全があります。わたしは天国に至る唯一の門です。わたしは神を冒瀆する者ではなく、父なる神の永遠の息子です」とイエス様は証しされたのです。

第二に、「わたしに属する羊たちは、わたしのことを知っており、わたしの声を聞き分けます。そしてわたし

イエス様の証し(2)

ことは、大きな特権です。人はもはや、暗闇の中で手探りする必要はないし、もはや迷う必要はありません。

従順なき信仰はありません。それは、せいぜい迷信か思い込みにすぎないのです。イエス様は注意や警告として「わたしの羊たちは、わたしの声を聞き、彼らはわたしについてくるべきである」と言われたのではなく、むしろ主は、「わたしの羊たちは、わたしについてくる」ということを事実としておっしゃっておられます。私たちは、主に従っているでしょうか。主のみところは、私たちにとってすべてを意味しているのでしょうか。

イエス様がパウロに出会った時、パウロは尋ねました。「主よ。私は何をしたらよいのでしょうか?」。パウロはこう聞くことで、次のことを言い表したのではないのでしょうか。「今まで私は、自分自身が主でした。私はすべてのことが完全に間違っていたということを認めざるを得ません。私は神に仕えていたと思っていたけれども、実際は悪魔に仕えていました。私は、生ける神に対して全く盲目でした。今の私は、なすべきことが分

と結びついて父のみこころを行ないます。わたしの羊はわたしにどこまでも従い、ついて来ます」と証しされました。

最後に、アフリカのザンビア共和国の大統領の証しを紹介したいと思います。

一九九三年の四月二十七日にザンビアのサッカー・ナショナルチームの乗った飛行機が大西洋上に墜落し、代表選手十八名を含む三十人全員が亡くなりました。その国葬が行なわれた時、ザンビアの大統領は国民にこう語りかけ祈りました。

「話をする前に、祈らせていただきます。なぜなら私は、この国そのものを主なる神に捧げたいからです。愛する国民の皆様、お願いいたします。ご一緒に祈ってもらいたいです…」

ああ、主よ。あなた様はアブラハム、イサク、ヤコブの神であります。そしてまた、あなた様を恐れる者の主

です。私は今朝、御前にひれ伏しております。この国は、あなた様のものです。あなた様ご自身が私たちを導き、あなた様の御心だけが行なわれますように。

自分勝手に王になろうと思っても成功しませんし、大統領として生まれた者もいません。あなたは与え、また取られるお方です。聖なる御名だけが崇められますように。私は、この世で単なる居留者であり、旅人です。私たちはあなたを信じ、あなたに信頼しています。裸で私たちは生まれたのであり、また裸で私たちは死ぬのです。あなたの御名だけがほめたたえられますように。

私たちの愛するあの若い人々は、自分の召される時がそんなにも早く来るものであることを知りませんでした。彼らは、私たちよりも罪深い者だったわけではありません。主よ、あなたの尊い御名をほめたたえます。私たちも、いつ召されるのかわかりません。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとし

す。あなた様の平安は、人のすべての考えにまさる真の平安です。私たちは、この国でまさにあなたの平安を慕い求めています。主よ、私たちはあなたを賛美し、ほめたたえます。主よ、私たちは自分の持っているものをすべて、あなた様に明け渡します。

他の誰かよりも私が立派なわけではありません。あなた様に遣わされた者にすぎません。あなたの御名をほめたたえるために、私は大統領になったのです。

——それから彼はさらに祈り続けようとしたのですが、大きな声で泣き始めました。そして祈り——

「主よ、私は今ここで国民の、またあなたの前に約束いたします。私はあなたの御名をほめたたえ続けます。あなたを宣べ伝え続けます。何があっても私は真理を語ります。私はあなた様を『主』としてほめたたえます。私たちの経験した理解しがたい導きは、今日始まったものではありません。あなた様に愛されたヨブも、一日で十人の子供を亡くし、財産、富もいっぺんに失くしたのです。今の真つ暗闇の中でも、私たちは主よ、あな

イエス様の証し(2)

て滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

(ヨハネ 3・16)

いと高き方の隠れ場に住む者は、全能者の陰に宿る。私は主に申し上げよう。「わが避け所、わがとりで、私の信頼するわが神。」と。
(詩篇 91・1、2)

主よ、私たちは感謝いたします。主よ、私たちはあなたをほめたたえます。主よ、この国の者たちを顧みてください。今、私たちは何を考えるべきかわかりません。何が起こったのかわかりません。しかしあなた様は、私たちの近くにおられます。御使いたちは、私たちを守るために遣わされた者です。

主よ、私たちは愛する人々を亡くしたのです。しかし、あなた様は必要な助けを必ず与えるお方です。主よ、あなた様だけが与えることのできる平安をいただきたいのです。この世の与える平安を私たちは望みません。あなた様ご自身の平安を、私たちは必要としているので

たに信頼します。この国の住民たちと共に、私は今告白します。

主イエス様、あなた様こそが私たちの神であり、主であり、この国を支配したもうお方です。私は勝利を得るようになります。イエス様によって、私たちは勝利者となります。主の御名によってお祈りいたします。アーメン」

このように祈ったのです。このような大統領を持つ国はおそらく他にないのではないのでしょうか。

まことに、まことに、あなたに告げます。わたしたちは、知っていることを話し、見たことをあかししているのに、あなたがたは、わたしたちのあかしを受け入れません。あなたがたは、わたしが地上のことを話したとき、信じないくらいなら、天上のことを話したとて、どうして信じるでしょう。だれも天に上った者はいません。しかし天から下った者はいます。すなわち人の子です。モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた

上げられなければなりません。それは、信じる者がみな、人の子にあつて永遠のいのちを持つためです。神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

(ヨハネ 3・11～16)



主イエスさまこそ私たちが必要としている すべてです

藤田 瑛二
えいじ

わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあつて平安を持つためです。あなたがたは、世にあつては患難かんなんがあります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。

(ヨハネ 16・33)

聖書では、私たち人間が住んでいるこの世の世界のことを湖や海にたとえて示しております。湖や海とはサタン(悪魔)によって支配されている腐敗し、墮落したこの世のことだと言っております。ヨハネの福音書16章33節に、「あなたがたは、世にあつては患難がありま

す。」とありますが、罪に満ちた、波風が荒れ狂っているこの世で、私たちは生活しています。そのため、毎日の生活の中で、予期しない様々な問題に出会います。そして、将来の不安と思ひ煩いわづらの気持ちをかかえ、悩み苦しみながら過ごしているのが、ほとんどの人の実情ではないでしょうか。

また、この聖句は続けて「しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」とあります。主イエスさまを信じ受け入れた者を、主イエスさまは不安や思い煩い、悩みや苦しみから解放してくださる、この世の勝利者として歩ませてくださると約束しておられます。

けれども、私たちはみことばの約束通り、主イエスさ

主イエスさまこそ私たちが必要としているすべてです

まと共に歩み、喜びに満たされた、心豊かな人生を送っているでしょうか。私たちの現実はどうでしょうか。また、私たちが喜びに満たされた生活を送れないのは、どこに問題があるのでしょうか。このことについて、考えてみたいと思います。

なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、ご自分と和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となつて、悪い行ないの中にあつたのですが、今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。(コロサイ 1・19、22)

に頼つて、人に相談してみたり、^{まは}的外れのことを行なつていることが多々あります。そうならないために、主イエスさまは私たちにとつて、どのようなお方であるかをもっとよりよく知っておく必要があるのではないのでしょうか。このことについて、ヨハネの福音書から見てみたいと思います。

イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。

(ヨハネ 14・6)

ここで、主イエスさまは、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」と言っておられます。このことについて順番に見てみたいと思います。

最初に、主イエスさまは「道」であるということについてです。主イエスさまは、私たちの人生の道は、地図で示されるようなものではなく、主イエスさまご自身

主イエスさまこそ私たちが必要としているすべてです

私たちが、現在の腐敗し、墮落した世にあつても、聖く、傷なく、非難されるところのない者として、生きていくことができるようにと、主なる神は、私たちに主イエスさまを遣^{つか}わしてくださいました。主なる神は、みこころによって、満ち満ちた神の本質を主イエスさまに宿らせてくださったのです。私たちの必要はすべて主イエスさまご自身のうちにあるのです。

ピリピ4章19節に、「私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもつて、あなたがたの必要をすべて満たしてくださいます。」とあります。私たちの人生の歩みの中にあつて、私たちが日常生活で必要とするものとはどんなものでも、主イエスさまの中にあるのです。ですから、もし私たちが、私たちの身に起こる問題を解決しようとするなら、問題解決の最善策をお持ちである主イエスさまを信じ、主イエスさまに祈り求め、おゆだねすることが必要です。

けれども、私たちが問題に出会うと、主イエスさまに頼ることを忘れてしまい、自分の力に頼ったり、人の力

であると言っておられます。ヨハネの福音書14章6節に「わたしを通してでなければだれひとり父のみもとに来ることはありません。」とありますが、私たちが今いる所から、神のおられる所まで通じている唯一の道は主イエスさまご自身なのです。

神のみもとへ導かれた私たちは、主イエスさまが、神のみもとに通じる道であることを、救われて以来経験してきました。そしてこれからこのことを、深く認識する必要があります。

私たちが目の前の問題のことで悩み、解決の道を探し求めている時、自分の力で解決しようと努力し、道である主イエスさまを見失っていることがしばしばあります。私たちが解決の道を探し求めて努力している限り、敗北の道を進んでいるのです。私たちは問題に出会ったら、自分には解決する力がないことを悟つて、「私の力ではできません。主イエスさま、あなたが私のうちでしてくださいように」と、主イエスさまに祈り求め、ゆだねることです。主イエスさまに祈り、主イエス

さまを信頼して待ち望むなら、主イエスさまは私たちのうちで最善を成してください。

第二に、主イエスさまは「真理」であるということについてです。真理と言うと、私たちは主イエスさまの教理や教えと思いますが、真理とは主イエスさまご自身だと言っておられます。そして、ヨハネの福音書8章31、32節に、「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」とあります。私たちは主イエスさまの教えについてはよく知っております。でも、そのことがどれほど私たちを自由にしてくれたでしょうか。私たちは主イエスさまについての教えには親しんでおりますが、主イエスさまご自身には十分親しんでいないのです。どんな真理でも教理であれば、それには人を解放する力はありません。でも、真理である主イエスさまは、実際に主イエスさまに触れたすべての人を解放してください。真理による自由とは、私たちが日常生活の中

で、主イエスさまと共に十字架につけられ、生まれ持った古い人は死んで、主イエスさまのよみがえりのいのちの中に生かされることです。主イエスさまご自身が、全てのことをしてください。

第三に、主イエスさまは「いのち」であるということについてです。いのちとは私たち一人一人の行為に現れるものです。しかし、私たちが主イエスさまのようになるうと、どんなに努力しても不可能です。というのも私たちが生まれ持ったいのち、古い人は何も努力しなくても、無意識のうちに自然に私たちの行動に現れてきます。これと同じように、主イエスさまのいのちも、自然に私たちから現れてきます。問題は、主イエスさまのいのちが力を発揮できるように、生まれつきの古い人は主イエスさまと共に十字架につけられ、死ななければなりません。死のない所にはよみがえりのいのちはありません。よみがえりのいのちは十字架と切り離せません。

ヨハネの福音書11章25節に「わたしはよみがえりで

の肉です。

(ヨハネ 6・48～51)

す。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」とあります。主イエスさまはよみがえりのいのちなのです。また、ヨハネの福音書12章24節で、主イエスさまは、「一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。」と、また、ヨハネの黙示録1章17、18節で、「わたしは最初であり、最後であり、生きている者である。わたしは死んだが、見よ、いつまでも生きている。また、死とハデスとのかぎを持っている」と、おっしゃっております。

主イエスさまは生けるいのちのパンです

わたしはいのちのパンです。あなたがたの先祖は荒野でマナを食べたが、死にました。しかし、これは天から下って来たパンで、それを食べると死ぬことがないのです。わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きます。またわたしが与えようとするパンは、世のいのちのための、わたし

ヨハネの福音書6章48節で、主イエスさまは、「わたしはいのちのパンです」とおっしゃっております。パンとは何でしょうか、パンとは私たちの飢えを満たすものです。私たちは、食べ物を食べたなら、力づけられ元気に活動することがよみがえります。主イエスさまは、私たちにいのちを豊かに与えるために来られたお方です。私たちは主イエスさまを食べて満足したことがあるでしょうか。みことばをいただき、一時的な励ましを得たことがあると思いますが、いつまでも続く満足はどうでしょうか。私たちは、主イエスさまが永遠のいのちのパンであることを見いだして、絶えず主イエスさまを食べることを学ぶ必要があります。

ヨハネの福音書4章6節から26節に、主イエスさまが空腹で、旅の疲れもあって、ヤコブの井戸のかたわらに腰をおろして休んでいた時、水を汲みに来た一人のサマリヤの女の人に会い、この女の人の必要を満たして

主イエスさまこそ私たちが必要としているすべてです

あげたことが述べられております。

ヨハネの福音書4章32、34節に、「わたしには、あなたがたの知らない食物があります。」「わたしを遣わした方のみこころを行ない、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です。」とあります。

主イエスさまがサマリヤの女の人にしたことは、主イエスさまご自身の必要を満たすことでもありました。主イエスさまがこの女の人の中で泉となり、その湧き出た水が飲まれるとき、主イエスさまの空腹がいやされていたのです。主イエスさまは人に食べられるいのちのパンだからです。

主イエスさまはいのちの光です

イエスはまた彼らに語って言われた。「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。(ヨハネ 8・12)

イエスさま、この問題をあなたが対応してください。おゆだねします」と、祈る者へと変えられます。

私たちは主イエスさまのうちにあります

しかしあなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあります。キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いと^{あがな}になられました。

(1コリント 1・30)

このように、神は私たちを主イエスさまのうちにおくことによって、神の目的を達成されるのです。また、コロサイ人への手紙3章11節に、「キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです。」と、ありますように、主イエスさまが私たちの知恵であり、主イエスさまが私たちの義であり、主イエスさまが私たちの聖めであり、主イエスさまが私たちの贖いであるのです。即ち、主イエスさまは私たちの必要のすべてなのです。

主イエスさまこそ私たちが必要としているすべてです

主イエスさまは私たちに光を与える方であるばかりか、主イエスさまご自身が光であると言っておられます。主イエスさまはこの世界を照らす世の光です。そして、主イエスさまを信じ、受け入れている私たちは世界を照らす光以上のもの、即ち、いのちの光を持つのです。このいのちの光は、私たちが頭で知る知識ではありません。知識は人を高ぶらせるとありますが、人は知識を用いて自分自身を高くすることができます。その結果、自分に知識があれば誇らずにはおれないのです。

いのちの光は、その光を受けた人を高くする効果は決してありません。いのちの光は高くするのではなく、人を低くするのです。いのちの光は人の性質、人の生まれ持ったいのち、自我を破壊するものです。いのちの光は生まれながらのいのちを、強烈な輝きで、無力、無能にしてしまい、主なる神がご目的をご自身で成し遂げられる道を私たちのうちにお造りになるのです。ですから、このいのちの光を受けた人は、自分に絶望して、「私はどうしようもない者です。私にはできません。主

全能の神はすべてのものを主イエスさまのうちに入れられたので、神が私たちに与えるものは、主イエスさまだけであり、主イエスさまを除いて他に何もありません。ですから、私たちが必要としているのは、神の賜物、即ち、謙遜、忍耐、寛容、柔和、聖さなど、などを個別に受けることではなく、すべてを持っておられる主イエスさまご自身です。

主なる神は、ご自身のものであるイエス・キリストを、私たちのうちに捜し求めておられます。私たちのうちから、ご自身が現れることを求めておられます。神のためになしよとする力は、源がどこから来るのかが問われます。神は『神のためです』というだけでは、よしとされません。源が主イエスさまのいのちから流れ出ているかどうかです。

ですから、私たちは、私たちのうちにおられる主イエスさまを、心から信じ、感謝して、主イエス様にすべてを成していただくことです。



裕之さん(一番右)とご一家

一歩一歩の信仰の歩み

山口 裕之

なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、ご自分と和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。

(コロサイ 1・16～20)



藤田 瑛二 (日立キリスト教会)

あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださいましたその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。——(エペソ 2・4、5)

生^お立^たち

神である主は、土地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。

(創世記 2・7)

私は、一九五二年二月、福岡県のはずれにある朝倉という所で、農業を営む母の実家にて生まれました。私が生まれた場所は、七十二年ほど経ちますが、今もまだそのままだまま残っています。まだ、産院での出産ではなく、産婆^{さんば}さんにお世話になったそうです。その後、高校生まで」と

んこつラーメンの発祥地」である福岡県久留米市で育ちました。サラリーマンの家庭で、二人兄弟の長男です。

父は、朝鮮(現在の韓国)からの引揚者^{ひきあげしや}で、祖父が警察官だったため、その地ではそれなりに良い生活をしていました。しかし、終戦となり、父の家族が日本に引き揚げてからの生活は、惨憺^{さんたん}たるものだったようです。

私は、小さい頃は身体が弱く、幼稚園時代は扁桃腺^{へんとうせん}炎^{えん}を頻繁に発症し、高熱のためほとんど通園もできなかつたようで、母には特に心配をかけました。そういうことで、小学校一年生の冬休み、叔父(母の妹の夫)さんが耳鼻咽喉科の医院をしていましたので、そこで扁桃腺手術を受けました。しかし、その手術中に多量の出血をし、生命の危機を経験しました。叔父さんの知り合いである医師の協力と父からの輸血で九死に一生を得ました。今考えると主によって生かされました。

中学校は久留米市でも一、二を争うマンモス校で、いわゆる「団塊の世代」直後の世代であり、一クラスが約

四十五名の十五クラス、三年生までの全校生徒数が約二千名と今では考えられない生徒数でした。また、この中学では、三年間プラスバンド部(楽器はアルトサックス)に所属し、主にアメリカの行進曲などを演奏していました。時々、気の合った仲間と先生には隠れてビートルズの曲などを演奏したりしていました。当時、彼らの音楽をやるのは「不良」がやることで、あまり公には演奏できませんでした。その様な時代でした。勿論、楽譜などではなく、ラジオを聴き、自分の耳で曲を覚えて楽しくやっていました。

高校からギターを自分で練習し始めました。音楽のことを書いたのも、イエス様への導きの一つのキーワードになると思います。高校を卒業し、一浪して福岡市のミッション系の大学に入学しました。この大学では、神学部でもないのに「キリスト教学」という単位を一年から四年まで必修として取らなければなりませんでしたが、私はこの当時、大学自体にあまり興味がなく、大

学は良い就職口を見つけるための一つの通過点のよう

な位置づけで、当時の社会的な風潮、三無主義「無気力・無関心・無責任」にどっぷりはまり、ほとんど授業には出ずアルバイトと、住んでいた福岡市の六本松に近い下宿に閉じこもった生活が続きました。両親には本当に申し訳ないことをしました。イエス様はまだ全く遠い存在でした。ただ、三年生頃にアコースティックギターを中心とした大学の同好会のフォークグループに加入し、そこで家内に出会い、交際を始めました。そして、何とか無事大学を卒業し、シャッター大手の会社に入社しました。この会社には、定年まで、その後延長して四十四年間お世話になりました。後で知りましたが、この会社の創業者は、賀川豊彦氏に師事したキリスト者でした。

入社後一年して、家内と結婚し家庭を持ちました。それから会社人間として、朝早くから夜遅くまでよく働きました。出世欲もあったと思います。

会社は、その当時はまだ週休二日制の完全実施ではなく、隔週の土曜日が休みでした。男性が働いて経済的に家庭を維持し、女性は家庭を守ることが家族の幸せであると信じていました。また、それで良いと考えていました。何と自己中心で独りよがりの思いであったのでしょうか。学生時代三無主義の中にいた若者が、会社人間となり企業戦士と変貌したのです。そのような生活が約十数年続きました。

教会へ

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。

7人の証し

Unser Herr lebt

教会の玄関のところに掲げてあったみことばです。これから平凡な男の遅い一步一步の信仰の歩みが始まります。劇的に変えられる何かがあったのではなく、主イエス様の「恵み」だけで、イエス様の道が計画されていました。

以前より、私は次のように考えていました。「この世界に神はいない。自分は無神論者で他に頼れるものはなく、自分自身だけが頼りで健康に留意し、懸命に働き、家族を養っていかなければならない。それが私の義務である」という考え方でした。ただ、一面では、「銀河系宇宙、全世界、動植物、自然など偶然にできたものではないかもしれない」など、どの様に表現していいかわかりませんが、強いて言えば「大いなる摂理」というものがあり、人類が生活して行くのに最善の環境を整えているのではないかという思いも心の中にありました。

実際のな一つの現象面としては、太陽と地球が適切な位置に置かれ、人間が生きて行く温度、環境を完全に整えられているように、これはこの「大いなる摂理」により意志を持ってなされたことで、偶然の結果ではないのではないかと思っていました。でも、これが天地万物を創造された主なる神と結びつくことはありませんでした。

三番目の娘が与えられたころ、私たちは、福岡県春日市というところに住んでいました。そして、そのころ妻が教会へ行きたいと言いました。信仰は個人の自由なので、強固に反対はしませんでした(ちよつとは嫌な顔をしたかもしれませんが)、「教会に行くなんて何かあったのかな」という感じでした。確かに妻は、今までの家庭生活に疑問を持っていたのでしよう。私は仕事一辺倒で、家事・育児はすべて妻任せ、経済的にはある程度安定していましたが、生活に何か空虚なものを感じていたのでしよう。最初、妻は一人で教会に行っ

ていましたが、送りに行くだけならと、私が車に乗せて行くようになりました。その後は、何かお決まりのコースのようです。そうです。そのうちに教会の後の方の席に座るようになりました。その教会は、米国の牧師がやっている教会で、家族的でかつ組織化されておらず、そこにいるだけで何か清らかな空気を感じたことが思い出されます。牧師御一家との交流が続きました。

そして、通い始めて数か月経ったところでしうか。牧師から「山口さん、あなたそのままであつたら地獄に行きますよ」と突然言われ、驚いたのやら、何故という思いの後、段々怒りがこみ上げてきました。翌日、その意味をもっと聴くため、教会に向かいました。何故私が地獄に行くのか、人に地獄に行くと言えらあなたは何者なのか。様々なことを質問したと思います。何という高慢な態度だったのでしょうか。牧師は、「イエス・キリストを信じなければ人は地獄に行きます。人は罪人です。イエス・キリストの十字架の贖いがなければ、人は罪を

持ったまま、地獄に行きます」はつきりと彼は答えました。今は、彼のこの言葉に感謝しています。イエス様が少しだけ近くなりました。三十五歳の時でした。そう言える彼の信仰はどこから来るのだろうか。その解決方法は聖書にあるのだろうかと思ひ、聖書を勉強してみたいと積極的に読むようになりました。また、同時に英語の聖書で英会話を学びました。聖書を理解し、納得したら信じようとしていました。聖書を何か人生の指針が書いてあるテキストと同じように扱っていました。でも、それも今考えるとそれは間違っていました。聖書は勉強できるものではない。理解、納得するものではないからです。まさしく、それは神様のみことばです。

広島への転勤そしてキリスト集会へ

あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。

御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めてであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことに、第一のものとなられたのです。

(コロサイ 1・17、18)

一九九二年私が四十歳の時です。この年は我が家にとって様々なことが起こされました。四月に長男の誕生、八月に父の死、十月に牧師の息子(二十歳代)の死、十一月に広島への初めての転勤・転居です。一家七名、乳飲み子の長男を連れて広島市へ転居しました。上の子供達には、転校に伴ういじめなどを経験させ申し訳なく思っています。私も転校の経験があり、できれば転校をさせたくはありませんでしたが、子供たちも一緒に

に行くと言ってくれました。私が単身の生活ができな
いことを知っていたのでしよう。

私たちは福岡時代に知り合った兄弟姉妹の紹介で、広島市東区にある同盟という教会に集うようになりました。しかし、その教会に集いだして、二、三年経ったころ、何か空しい思いを感じ、礼拝が義務的で喜びが持てない状況になりました。その時は、礼拝時に教会の皆様にお渡しする「週報」なるものを作成し、組織的なところに慣れていない者が、何か画一化された信仰の集合体に窮屈さ、反発を覚えるようになっていたのかもしれない。その責任者の方からは、留まるようになり熱心に説得されましたが、最終的にその教会を去ることになりました。ただ、これもイエス様の御計画です。この教会の本棚にベックさんの書かれた『神の愛』という書籍があったこと、そして同時期に妻は、知り合
いから、広島市にベックさんという宣教師の方が来られ、家庭集会でお話しをされるということを聞き、集い

に参加しました。私は、何か意地のようなのがあったのでしよう。この時は、参加はしませんでした。しかし、ほどなく広島島のキリスト集会に集うようになりました。四十三歳の時でした。

バプテスマ(洗礼)

道を進んで行くうちに、水のある所に来たので、^{かん}官は言った。「ご覧なさい。水があります。私がバプテスマを受けるのに、何かさしつかえがあるでしょうか。」

そして馬車を止めさせ、ピリポも宦官も水の中へ降りて行き、ピリポは宦官にバプテスマを授けた。

(使徒 8・36、38)

「山口さん、そろそろバプテスマを受けたらどうですか」福岡の牧師も、広島の宣教師も数回私にバプテスマの打診をしてきました。私は、それはあくまでも儀式な

ので、そのような形式だったことはしたくない、意味がないとは言わないまでも、そんなに重要とは考えていないという理由から、ずっと受けるのを拒んでいました。本当に頑かたな者だったと思います。救われて八年も経っていました。証しにもなりません。しかし、主イエス様はそのような頑かたな者に対して、素晴らしい御業を見せてくださいました。

キリスト集会に集うようになって、次の年だったので
しょうか「広島喜びの集い」が広島の阿品台あしなだいで開催されました。集会に集う多くの方々と話をしていた時、ある方が「ベックさん、山口さんはまだバプテスマを受けてないですよ」と皆様に聞こえるような大きな声で言いました。すると、ベックさんがすぐ私の近くに寄って来られ、「来年、御代田において」と言われました。私は、「何故バプテスマを受けてないの、どうして」という質問が来るかなと一瞬覚悟しましたが、ベックさんは、ニコツと笑いながら先ほどの言葉を言われました。私と

しては何か拍子^{ひょうし}抜けした感じで「はい」と言っていました。そして、翌年、御代田喜びの集いで約三十名の兄弟姉妹の方々と共に、バプテスマにあずかりました。証しにならない者が、イエス様の証しのためにその場所を準備され、イエス様が、私の意思を決定させてくださいました。

それから、二〇〇一年また福岡への転勤、この時は福岡のキリスト集会の兄弟姉妹の皆様には本当にお世話になりました。ここでは、様々なことが起こされましたが、多くのことを学びました。イエス様は、確実にその人の真実を追究され、集団ではなく、一人一人の信仰を確かにされます。また、「メサイア」の合唱の練習を通して、全国各地の兄弟姉妹の方々と知り合い、ともに主を称^{たた}える喜びに感動を覚えました。

再度福岡から広島へ

詩と賛美と霊の歌とをもって、互いに語り、主に向かつて、心から歌い、また賛美しなさい。いつでも、すべてのことについて、私たちの主イエス・キリストの名によって父なる神に感謝しなさい。キリストを恐れ尊^{たつと}んで、互いに従いなさい。(エペソ 5・19・21)

ふたたび広島への転勤となりました。五十四歳の時でした。下のほうの子供たちとともにまた転居しました。数年後、九州から家内の母も同居するようになりました。母はその生活の中でイエス様の救いにあずかりました。そして二〇二二年、十数年この広島地で共に暮らしたその義母を天国に送りました。私も、この広島地が地上での終^{つひ}の住みかになるのでしょうか。それは私にはわかりませんが、本当の故郷、天の都^{かえ}に還る日^{かえ}で主なる神イエス様に頼って生きて行ければと願っています。

救いの約束

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。(使徒 16・31)

最近、次のような思いが与えられています。主なる神、イエス様がご自身を人間に現わされる時には、多くの場合、何かしら人間を通してご自身の存在を明らかにされるということです。突然、何事もなくイエス様がご自身を個人に現わされるのは非常に稀^{まれ}で、その時、即ち主の恵みの時に、誰かしら周りの人間を使って、あるいはその人を導き手として、ご自身を明らかにされます。イエス様は、家族、親戚、友人、知人などの方々をお用いになるのでしょうか。私たちもそのようにして導かれました。

そして、イエス様は、この様に言われます。「あなたは私を知らないが、わたしは確実にあなたをずっと前から

ら知っている」また、「あなたを捨てない」と言われます。遠いところにおられる神様ではなく、私たちの身近なところ、御霊として私たちの中にも住んでおられる神様です。私の周りには家族、親戚、友人、知人とまだイエス様をご存じない方々がおられます。私自身、これからどのくらいこの地上の歩みが残されているか分かりませんが、この様な私も救われたのです。イエス様への信仰、信頼を持つことは、私たちの生き方の基盤であり、たましいのための安らぎです。まだ信仰を持たれていない方々の救いのために、イエス様だけに希望を持って祈って行きたいと思っています。

まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎^{とが}のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、

7人の証し

イエスはわがいのち

内田 玲子



玲子さん(一番左)、ベックご夫妻たちと

彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。
(イザヤ 53・4〜6)

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

(ヨハネ 3・16)

山口裕之(やまぐち ひろゆき)
久留米市立東国分小学校、久留米市立諏訪中学校、久留米市立南筑高等学校、西南学院大学経済学部、三和シャッター工業株式会社定年退職

妻 利枝(としえ)

長女 小村理恵(おむらりえ)

次女 住本真紀(すみもとまき)

三女 小林ゆり(こばやしゆり)

四女 山口あい(やまぐちあい)

長男 山口直樹(やまぐちなおき)

孫 四名

私は、一九五二年熊本県で生まれました。熊本と宮崎の県境で、日本三大急流球磨川の源流があり、四方を山に囲まれた自然豊かな所で育ちました。列車もバスもここが終点というこの片田舎に、ベックさんが、何度も来てくださったのでした。そのことは後で、百歳になっていた祖母、父、母の救いへと繋がりました。

ふたりは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」と言った。

(使徒 16・31)

家業は祖父の代より林業、製材業、後に製茶業と手広く事業をなしていました。家族は、祖父母、父母、兄、姉、妹、伯母で従業員も多くとっても賑やかな日々を過ごしました。

五歳位の時、近所の子供たち皆でかくれんぼをして遊んでいました。私は少しだけ戸の開いていた大きな

米蔵に隠れていました。暫くして外に出ようとしたらいつの間にか戸は閉じられていてこどもの力ではびくともしない重さでした。私は、必死で「助けて！助けて！」と叫んでいました。どのようにして開けてもらったのか思い出せないのですが、そのことがあってから、何とも言えない暗闇への恐怖が始まったのです。夜寝ていると、真っ暗な中で得体の知れない大きな黒い物体が襲ってきて恐怖におののくようになっていました。そのうち、死んだらどうなるのだろうかと考えてようになり、大宇宙に永遠に一人ぼっちでいることを想像すると、それは大変な恐怖でした。小学校までは家族と一緒に寝ていましたが、この恐怖をだれにも言えず、ずっと自分の中にしまっていました。後になって聖書のみことばによって完全に解放されました。

神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。

した。兄や姉がミッション系の高校に行っていたこともあり、彼らに感化され「清いものに対するあこがれ」から、「キリスト教」を求めていました。

高校へはバスで通学していましたが、その町に聖書教会があり日曜日はそこに行くようになりました。特別伝道集会在夜あり、それに出たくて父に話し父の知人の方の家に泊めてもらって行きました。当時は校則が厳しく夜間外出は駄目だったようで、翌日、職員室に呼び出され補導教諭より叱責されました。それでも行きたい私は高校のすぐ近くに住んでおられた教会員の方の所へ下宿し身元引受人になってもらい、それから、夜も行くことができるようになりました。今思うと、両親がなんの反対もなく、私の思いを尊重してくれたことは感謝しかありません。

その後、大学へ進学しました。そのころ「社会福祉」という新しい分野ができ、私の目指すところはこれだと思い、キリスト教系で社会福祉を学べる所を探しま

(コロサイ 1・13)

わたしはよみの力から、彼らを解き放ち、彼らを死から贖おう。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。よみよ。おまえの針はどこにあるのか。あわれみはわたしの目から隠されている。

(ホセア 13・14)

そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださいさるためでした。

(ヘブル 2・14、15)

キリスト教との出会い

中学生の時に読んだシュバイツァーの本に感銘し、私も将来神様の為、人の為に一生を捧げたいと思いま

した。四国学院大学に進学しました。歌うのが大好きだったので大学の聖歌隊に入りました。主を大いに賛美できたことは感謝でした。

主人との出会い

主人とは同じ大学で知り合いました。主人は高校卒業後、二年間社会人として働き大学に入り、知り合ったのは私が大学三年の二月で主人は卒業を控えている時でした。

主人は「考」というその名前の通りに物事を深く考える人でした。短絡的で単純な私とは全く対照的で、自分にはない異質なものに惹かれ、それが好意に変わり卒業して半年で結婚しました。大事な結婚を祈ることも知らず自分中心の思いでした事で、その後の結婚生活が火の中、水の中を通ることになるとは知る由もありませんでした。

7人の証し

Unser Herr lebt

私が結婚を決めたのにはもう一つの理由がありました。主人も高校時、友人を通して佐賀県の嬉野バプテスト教会で一九六九年に洗礼を受けていたのです。でも二人が会った頃は自己実現のほう的大事になっていたように教会へは行かなくなっていたようです。それでも大学時代には、主人を通して、一人の方が導かれました。その方は後にあちこちの伝道所の立ち上げに奔走したり、多くの方に福音を伝え、伝道に邁進されました。最近の事ではその方が中学時代の古希の同窓会の時、隣りに座った方に福音を伝えると、とても熱心に聞かれたと、私に紹介されたのですね。キリスト集会にお誘いしました。

その夫の友人の方が我が家の近くに引っ越すことになったとき、新しく導かれた方も手伝いに来てくださいました。その方は「今まで生きていてこんな世界があるとは思わなかった」と純粹に喜ばれていました。とても謙遜な方で、今は奥様とともに家庭集会や礼拝に集

われています。

主人は高校時代はとても信仰熱心だったようで主人の聖書を見ると、どこを開いても赤線だらけで読み込んでいるという印象でした。主人の兄の話によると教会学校でも熱心に奉仕していたそうです。聖歌の裏表紙には、「主よ 私の罪を赦し 私の身体を恵まれぬ人々の為に お使いください アーメン」とあり、「信徒の手帳」の裏表紙には次のことばが書かれています。

わたしたちは生きるのも主のために生き 死ぬのも主のために死ぬ だから生きるにしても死ぬにしてもわたしたちは主のものなのである。

ローマ書十四章八節(口語訳)

結婚式は、主人の母教会である嬉野バプテスト教会で神と人の前で挙げることができました。

主の声(1)

結婚して次々に年を置いて子どもが与えられ、日常の忙しさに没頭する日々が続き、教会へはクリスマス以外に、年に数回行く程度でした。ある日、車を運転している時、急に賛美が心の奥深くに流れてきました。それは聖歌(総合版)七六二番「われは思うわがため」でした。

われは思うわがため 十字架にかかりて
罪のこの身 贖いたもう

主の愛の深さを 我さえも愛したもう
我さえも愛したもう

救い主の愛の深さ 我さえも愛したもう

われは思う三度も いつたびも背きし

罪人をも なお受けたもう

主の愛の深さを 我さえも愛したもう

我さえも愛したもう

救い主の愛の深さ 我さえも愛したもう

とめどもなく涙があふれ、「イエス様! イエス様!」と号泣していました。それは私の思いではなく、後に知ることとなる「御霊の声」でした。賛美の大好きな私に賛美歌を通して主が働いてくださったのです。「神様が呼んでおられる」「神様の所へ行こう」と矢も楯もたまず教会に行きました。「洗礼を受けよう」とすぐに思いました。

実は高校、大学時代に何度も特伝(特別伝道集会)に集った時、洗礼への招きがあったのですが、私の心は「いや、まだ受けたくない。受けると自分がなくなってしまう」という思いになりピタッと心が閉ざされていました。その時の私の心の中の比重は、極端に言うとお神様が一割で自分自身が九割を占めていました。

洗礼の恵み、そして集会へ

もう一人の方と洗礼を受けるため、教会の「求道者会」に行き始めた正にその時、既にキリスト集会に集っていた妹から宮崎県の「えびの」でのバイブルキャンプの案内が来たのでした。

天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。
(伝道者 3・1)

イエス様は私の全てを知っておられたのです。私の頑なな心をイエス様に降参すること以最善の時に導いてくださったのです。イエス様がどれだけ私を愛してくださっているか、感謝しありません。

「えびの」でのバイブルキャンプにはたくさんの人々が来られていました。皆さんニコニコとしたお顔で輝いておられ、この方々は何も問題がないのでこんなに喜んでおられるのかなと思っていました。何人かの方とお

八月二七日、イエス様の一方的な恵みと祝福のうちにベックさんより洗礼の恵みにあずかりました。

それから一気に集会へ集うことに方向転換しました。集会へは当時、片道が一時三十分余りの道のりを週三回家庭集会、祈り会、礼拝と子どもたちを連れて出かけていました。行きは朝日を浴び、帰りは夕日を浴び、主の群れに集うことはとにかく嬉しく、帰りは疲れるどころか反対に主からの力、元気を頂いて帰っていました。

見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽しさであろう。

(詩篇 133・1)

「キリスト教」からキリストへ

長年、私は頭だけの信仰であり、牧師を通して知った神観念しかありませんでした。「この世にあつてどう

話しすると、家族の問題、重い病気の方など様々に大変な問題を持つておられるのがわかりました。それにも関わらず、とても喜んでおられる様子を見て、大変驚いたのを覚えています。そして何か本物を見た思いでした。でもまだその時は「教会」で受洗しようと思っていたので、そのことをそばにおられた集会の方に話すとその方が「玲子さん、受けようと思った時が主の時よ」と言われ、私はここで受けようという思いになり、不思議となんのためらいもありませんでした。すぐに、ベックさんが会ってお話してくださったのですが、肝心なこととはあまり記憶になく、当時の私は(今もそうですが)傲慢な者で「救いの確信があります」と言った覚えがあります。その後、「私はホスピスに携わるお仕事がしたいのです」と言うベックさんは「そんなことより家族の救いが大事でしょ」と言われ、その時の私は何もわかっておらずシュバイツァーのごとく生きたいという「私が生きる」自己実現の世界にいました。一九八九年

生きるか」が大事であり、聖書を深く読むわけでもなく、神様も遠い存在でした。肝心な十字架も、罪も、御霊の働きも完全にぼやけていました。集会に導かれ、頭だけの信仰からイエス・キリストを信じる本物の信仰へと、長い道のりでしたが変えていただきました。

ところが主人は、私が集会に行くようになり、「イエス様がすべて!」と言った言葉が大変なショックだったようで、益々熱心になる私に対して私の信仰は認めているものの何かにつけて不機嫌になっていきました。ただ、私がどんなところへ行っているか知りたかったよう、集会にも二度程、一緒に参加してくれました。

それからの主人は、心の奥底は深い孤独の中にあつたのか、それを打ち消そうと大好きなお酒にのめりこみ、酒乱状態が日常でした。

でも、私には攻撃的な一方、子どもたちには優しい夫でした。私は「イエス様! イエス様!」と心の中で叫びながら「私が悪いのですか? 何故理不尽なことばかり

なのですか？」と、イエス様に文句ばかり言い、自分を義とするものでした。そのような私をも主はあわれんでくださりその時々においてみことばをもつて励まし、慰め、力づけてくださいました。集会の兄弟姉妹のお祈りも大きな力で感謝でした。大変な苦しみが続きどうしてよいかわからなかった時、お忙しいベックさんがなんと、一か月の間に四国に三回も来てくださり、話を聞いてくださいました。ベックさんからは私の思いとは違い、「玲子は救われているからいいけどご主人の方はイエス様を知らないからかわいそうだよ」と言われ、苦しんでいるのは私なのだと思います。その時はまだそれを受け入れるだけの信仰がなかったのです。イエス様のご愛は計り知れません。見放さず、見捨てないイエス様がいつもともにいてくださいました。様々に来る火の試練の中にあっても不思議と離婚は考えませんでした。

来ました。すると今度は感謝に変えられて行き、今まで反発でしかなかったみことばが主からの言葉として、スーッと入ってくるようになりました。

それから、イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。

(マタイ 16・24)

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

(ガラテヤ 2・20)

「主よ、私はできません。私を通して主がしてください

彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。

(イザヤ 63・9)

主の声(2)

結婚して四十年の時が経った頃、「私が結び合わせたんだよ」と心の中に響いてくる声がありました。その声を聞いた時、事態が一変しました。それまでの「私は悪くない」という自分を義とする思いから、主が結び合わせられたのなら「絶対に間違いはなさらない」との思いに変えられ、頑なで強情なのは主人ではなくこの私であり、私を砕き主の似姿に変えて頂くためには、この主人でなければならなかったのだということを御霊様が教えてくださいました。「イエス様ありがとうございます。そういうことだったのですね」と一八〇度向きを変えてくださいました。すぐに主人に謝ることが出

い」と、一瞬、一瞬祈りながらの日々の訓練が始まりました。

私はすでに死んでいる。今生きているのはイエス様。イエス様にすべてを明け渡し、イエス様に生きていた。召されるまで砕かれる訓練ですが主がおられるので感謝です。すべてのことを主の御手から受け取って歩んでいく時、主の喜び、平安、感謝に満たされます。世界の基の置かれる前から選んでくださり、胎内にいるときから覚えられ数えられ玲子の一生は手に刻んだと言ったくださったイエス様。ちりに等しいこの者の為に、何一つ罪を犯したことのない全く聖いお方が十字架にかかって死んでくださり、そのことにより罪赦され、またこれから犯すであろう罪の一切も赦してください。そのことを本当にありがとうございます。そればかりではなくすでに天に住まいを用意してください。さって主を信じるすべての人とともに永遠に天の御国に住まわせていただく。こんな素晴らしい福音がどこ

にあるでしょうか。

今、私はイエス様なしには生きていきません。イエス様がすべてのすべてであり、いのちのいのちなのです。主は一人でも滅びることを望んでおられません。主のご再臨が近い今、主に喜ばれる証し人として残された日々を歩んで行けたら感謝です。一年前に教会でのクリスマスイベントに参加した折、九十一歳の方にお会いしました。お話しの中で「長年教会に行っているが自分はこの世の人と何ら変わらない。このまま死ぬわけにはいかない」と言われました。とても熱心な方でこれまで家族、親族を導かれ皆さん、教会で洗礼は受けられています。でも体験的にイエス様と出会っておられない為、知識はあっても生き生きとした喜びが全く感じられない様子でした。何度かお交わり話をした後、集会に行きたいと言われ甥子さんと一緒にお連れしました。今はお祈りするばかりです。

又、置かれたところで大好きな賛美を通して証しし

母のこと

母は一九九一年二月、六十九歳になる三日前に六か月の闘病を経て肺腺癌で召されました。ベックさんはそれまで何度も会ってくださいました。母が召される前にもキャンプの帰りに母の病室に来てくださり二人だけで会話し祈ってくださいました。母は私にはつきりベックさんに葬儀をしてもらいたいと言いました。母の兄弟の中には反対もありましたが、母の希望ということで主が勝利してくださり集会での葬儀となりました。ベックさんは高熱の中にあつたにも関わらず、福音を伝える使者として凜としておられ、その姿に驚きました。集会の証し集『光よあれ』（第4集）が五百冊以上参列者や来られてない方の元に届けられ、福音の種が蒔かれました。

父のこと

父は二〇一五年十月九十七歳で召されました。集会

たいと祈っていたら、イエス様はすぐに聞いてくださり、主を賛美するために諸教会から集まって構成された「聖歌隊・コールミルテ」に導いてくださいました。主は生きておられます。

夫の上にも五十年の時を経て、今は身体も弱められたこともあり穏やかになっていきますので感謝です。子どもたちもまだしっかりとはイエス様と繋がっていませんが、幼き日にみことばの種がまかれていますから感謝します。救いは神の領域です。ひたすら祈り続ける日々です。家族の救いはお約束ですから感謝します。

時が来れば、わたし、主が、すみやかにそれをする。

（イザヤ 60・22）

わたしは、わたしの契約を破らない。くちびるから出たことを、わたしは変えない。
（詩篇 89・34）

やバイブルキャンプ（喜びの集い）には何度も参加していましたがそれまで「天国も極楽も同じ。何を信じるかは本人の自由」と言っていました。八月に帰省した折も同じように言っていました。翌日、先に召された母はイエス様がられる天国にいたことを話すと、そうであれば自分も天国に行きたいと言いました。悔い改めが必要なことを話し、その後悔い改めのお祈りをする、大きな声ではっきりと「アーメン」と言い、前日の険しかった顔が一変してとても穏やかな顔になりました。お葬儀の時の棺の中の父の顔は笑っていて歓喜あふれる表情に驚きました。イエス様や母たちに会った喜びだったのでしよう。天国を確信できました。

祖母のこと

祖母は母が召された五か月後、一九九一年百歳で召されました。ベックさんから祖母に「天地万物を造られた神様が毎日、お守りしておられること、又、いつでも

喜んでお迎えに来てくださるので毎日を喜びと感謝で
過してください」と言われたことをとても大事にして
日々、過ごしていたようです。召される時は姉がそばに
いてイエス様の事を話し、意識混濁の中であつても頷
いていたと聞きました。(姉も夫の問題を通して救われ
ました。)

生きている間に、父、母、祖母の救いをはっきりと見
せてくださったことは何よりの喜びであり、感謝しか
ありません。

最後に、題名にした「イエスはわがいのち」は聖歌
六〇八番からつけました。

一、イエスはわがいのち また喜び

全ての全てぞ 我にとりて

悲しめる時は 慰め励ます

世に唯一人の 友ぞ

二、イエスは火の如き 試みにも

勝たせて 恵みを さらに賜う
日々成す技をば 祝して 実りを
豊かに 成し給う 友ぞ

三、イエスは かく 我に真なるを
忘れ奉る日の などあるべき
御旨をかしこみ 御技を励みて
日も夜も従い 仕えん

四、イエスは誰よりも 勝る友ぞ
世に生くる限り 我は 頼らん
世を去りて後も 永久までも
変わらぬ愛もて 頼らん

内田玲子(うちだれいこ)

熊本県立多良木高等学校卒、四国学院大学文学部社会
福祉学課卒

夫 考(はかる)

長女 愛(めぐみ)

長男 哲(さとし)

次女 優(ゆう)

三女 光(ひかり)

次男 新(あらた)

孫 三人



救われたのはただ神の恵みによるのです

後藤寛



寛さん(右から2人目)、ご家族と

胎内たないにいる時からなわれており、生まれる前から運ばれた者よ。あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。…なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。
(イザヤ 46・3、4)

私は鹿児島県大口市(現在は伊佐市)で一九五八年、農業を営む両親の長男として生まれました。

両親、五歳下の弟と四人家族で育ち、高校卒業後に上京して会社に就職しました。ここまではまったく信仰とは無縁の者でした。後に職場で出会った妻と結婚し、キリスト集会に導かれるようになり、イエス様の救いにあずかる恵みをいただきました。一男二女の子供が与えられ、それぞれが主の守りと恵みの中に成長し社会人となっています。節目節目で妻と共に、また子供と共に祈り、今に至っていることに感謝しています。

救いをいただいてから、イエス様は遠い昔から私を

導いておられたことを知るようになり、幼い頃の出来事が思い出されました。それは小学校五年生の時に急性腎臓炎になった時のことです。両親の会話から、医師より手遅れとの診断を受けたことが聞こえてきました。この時は、子供ながらに死ぬということを意識した時でもありました。その後、両親が治療を試みってくれる病院を探してくれて、入院治療の結果回復することができました。

中学・高校と成長する中で、何のために生きているのか、死んだらどうなるのだろうか、夜、寝床につく時に死について考えることがありました。その時には何か得体たたいの知れない恐れと不安とが襲ってきました。このことは答えの無いままで心の片隅に残っていました。今ではこれらの出来事も、後にイエス様と出会うためのものであったのだと思っています。

イエス様の救いへの導き

イエス様との出会いは、就職して十一年目の一九八八年、妻との出会い、結婚が機になります。妻は私と出会う前に吉祥寺キリスト集会に集い、一九八〇年にイエス様を信じ、洗礼を受けていましたが、試みがあり、信仰から離れていた時に私と知り会ったようです。

結婚後しばらくして、妻は魂の渇きと悔い改めとが与えられて、再び吉祥寺キリスト集会に集うようになりました。私は付き合いで行く程度ならと軽く考え、キリスト集会と一緒にいくようになりました。未信者だった私は周りに気を遣い、時折妻に不満を言っていたことの繰り返しでしたが、不思議と集会に集い続けました。

聖書の冒頭に「初めに、神が天と地を創造した。」(創世記1・1)とあります。このみことばを信じ受け入れることが出来ませんでした。イエス・キリストという人物の名前は知っていましたが、イエス様が人間の罪を贖あがなうためにこの世にお生まれになったこと、私の罪の身

7人の証し

Unser Herr lebt

代わりに十字架上でのちを捧げられたこと、そして信じる者に永遠のいのちを与えるために三日の後によみがえられたことを、聖書から知るようになりました。イエス様は歴史的に実在していたので、そうなのかも知れない、と考えたりもしました。しかしまだ、私自身の罪の問題に心の目が開かれておらず、素直に信じることが出来ませんでした。

この頃は、特にこれといった悩みはありませんでしたが、長女が生まれてから少しずつ家庭集会に集うようになりました。集会の兄弟姉妹との会話の中で、「子供は将来、父と母、どちらの道を歩めば良いか悩むようになるのではないだろうか」と尋ねられました。この言葉によって、私はこのまま曖昧な状態で良いのかと、真剣に考えるようになりました。時には「信じても良いのでは」と思い、ある時には「信じたふりでも」と悩み、「信じると口にしたら色々と不自由になるのではないか」と、心の中で葛藤していました。

ちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。(エペソ 2・4、5)

ベックさんとお交わりをする時があり、イエス様が私のために死なれ、よみがえられたことを信じる確信を与えられ、一九九一年五月に、吉祥寺キリスト集会で洗礼の恵みにあずかりました。多くの集会の兄弟姉妹が喜んでくださり、背後にたくさん祈りがあったことを知り、感謝いたしました。

このようにイエス様の救いに感謝してりましたが、社会生活では、この世とのバランスをとるために、仕事と信仰とは別々に考えていました。聖書が語っている罪の性質が根深いものであることを、私自身分かっていませんでした。

私の信仰がご利益的なものであったことを知る時がきました。

イエス様は私の心の内に隠れている罪の性質に光を

このような状態が三年ほど続き、一九九一年五月、ある交わり会で一人の集会の方から「後藤さん、もうそろそろどうですか?」と尋ねられました。その時に「信じます」と答える私がいました。自分でも驚きました。が、イエス様を信じると告白した後には、長い間の思い煩いから解放された喜びがありました。主は忍耐深く導いてくださり、イエス様を信じる者へと変えてくださったのです。

人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。(ローマ 10・10)

そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。(ヨハネ 8・32)

あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださいました。その大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私た

あてられました。

それは仕事上の試練でうつ病で苦しむこととなり、私が聖書のみことばを知識としてしか聞いていなかった事がハッキリと示されました。

だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。

(マタイ 6・24)

私はその頃、特に仕事面では、自分の知識と経験に頼り、それに従って行動することが、この世での常識と考えていました。しかしその後のバブル崩壊に伴い、勤めていた会社の倒産の危機から会社の合併へと、今までに経験したことのない、将来への不安と思い煩いが襲って来るようになりました。勤めていた会社の合併

がきっかけとなり、「自分は必要とされていないのではないか」と思い悩むようになりました。その様子に気がついた上司が部署の異動を配慮してくださいました。しかし、相変わらず自分の力と頑張りに頼っていましたので、状況は悪くなっていききました。異動した部署で、「能力がないと言われたくない」というプライドから、自分で何とかしなければと、一層自分中心の考えになっていききました。だんだんと会社に行くことも辛くなっていききました。常に何か失敗したのではないかと、自分の行動が心配で、不安感が強くなっていききました。このような状態が続き、このままでは会社に迷惑をかけると思い、退職することを上司に相談しました。

その後、人事の担当上司と面談し、まずは診療内科を受診することになりました。うつ病と診断され、休職して様子を見ることになり部署も人事預かりとなりました。退職ではなく休職の道を用意してくださいと主は妻と共に感謝いたしました。しかしながら休職中の状

態は、まさに次の聖書のみことばのとおりでした。

私の心が苦しみ、私の内なる思いが突き刺されたとき、私は、愚かで、わきまもなく、あなたの前で獣のようでした。しかし私は絶えずあなたとともにいました。あなたは私の右の手をしっかりとつかまえました。

(詩篇 73・21～23)

休職した当初は、やり残してきた仕事で不安になり、職場に何度も電話をして迷惑を掛けていました。また、このまま仕事に復帰できなかったらと、将来を悲観的に考えたり、その思いを打ち消したりと、考えるほどに悪い方向へと向かいました。その様子から妻は、私を家庭集会や集会の兄弟方とのお交わりに連れて行くようになりました。しかし自分の悩みは誰も分かってくれない。時には「神様はいない」とまで叫んでいました。集会の兄弟方との交わりでは苦しさを吐き

出すだけで、聞く耳はまったくありませんでした。

このように反発しながらも、不思議と集会に出かけに行きました。心では神様に助けを求めていたのだと思います。妻は同じような体験をされた集会の兄弟姉妹との交わりや祈りに支えられて、必死に祈りながら今の状況を耐えていることは感じていました。

主に嘆いたり咄いたり反発しながらも、時の経過とともに少しずつ落ち着きを取り戻し、心に平安が与えられ、私のことを理解してくださる方はイエス様しかおられない、と思う様になっていきました。

そして少しずつ思い煩いから解放されていきました。

それゆえ主は苦役をもって彼らの心を低くされた。彼らはよろけたが、だれも助けなかった。この苦しみのときに、彼らが主に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から救われた。…

主はみことばを送って彼らをいやし、その滅びの穴か

ら彼らを助け出された。

(詩篇 107・12、13、20)

このことから「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」(ペブル13・5)のみことばを体験的に知ることとなりました。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

(1コリント 10・13)

主は私の傲慢な思いを見過ごされず、試練を通して砕かれました。自分の無力さと愚かさを知り、悔い改めと、主に頼ることの大切さを教えてくださいました。

このことでは、多くの集会の兄弟姉妹が私の話を忍

耐をもって聞いてくださり、お祈りいただいたことに感謝しております。

神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる。
(ヤコブ 4・6)

父の召天

二〇一六年七月二日、父が召されるときにも、主は、堅く信仰に立つこと、イエス様が約束のみことばの通り導いてくださることを信じ、主にゆだねることの大切さを教えてくださいました。

イエスは彼女に言われた。「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたしは言ったではありませんか。」
(ヨハネ 11・40)

父は肺がんでしたが告知はされていませんでした。

ようです。それを聞いて、イエス様が父を迎えに来てくださったのだと確信しました。また、当初から心配していた、肺がんの痛みや苦しみから守ってくださったことに思い至り、最善の時に父を天の御国に迎え入れてくださったのだと、主のあわれみに感謝致しました。

父の葬儀では、母に心配をかけてしまいました。信仰を証しする機会として主が用いてくださいました。葬儀は仏式でしたので、父親の葬儀にも関わらず、私たちが焼香しょうかうをしないことがまず問題となりました。その理由は理解されませんでした。焼香の代わりに献花させてほしいとお願いしました。初めは難色なんしきを示されていましたが、家族も斎場の係りの方も了承してくださいました。そして係りの方から、「焼香の際にはそれぞれご自分のやり方をお願いします」と案内してください、献花用に小さな花束を用意してくださいました。仏式の葬儀でしたが、会場の雰囲気は明るくなごやかに感じました。

父の入院中に、落ち着いて話す時間が与えられました。その時にはイエス様の話に耳を傾けて聞いてくれました。

「神様、イエス様に『ごめんなさい。ありがとうございます。これからよろしく』行く先は天国だから心配ないよ」と何度も伝え祈りました。すると父は「わかつちよる、わかつちよる。この話は弟の毅たけしにも教えておけ」と言いました。この言葉で、父はイエス様の救いを受け取ったと確信でき安心しました。

父が召される日、その日は珍しく、母の調子がよく車を運転して病院へ行くことができました。そして二人だけの時間が持てたそうです。

そして、父が手を挙げて母を呼んだように見えたこと(誰かが来たので呼んだような様子であったこと)、そして母がいる中で、苦しむことなく静かに息を引き取ったそうです。母も看護師さんも、急な出来事で驚いたとのこと。そのくらいあつという間の出来事だった

葬儀の終わりに、参列してくださった皆様に私からご挨拶することになりました。「今の気持ちを表したことばが聖書の中にあります」と言って、みことばを読んであらうご挨拶することが出来ました。

天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。
(伝道者 3・1、2)

…神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすつかりぬぐい取ってください。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。
(黙示録 21・3、4)

…神のなさることは、すべて時にかなって美しい。
(伝道者 3・11)

7人の証し

Unser Herr lebt

その後のお坊さんの講話の中で、「すべてには時があるということ。生きている時だけではなく死も含めて考えてください。そして、今息子さんが言われたお父さんがお酒を飲むところは嫌いだっただ、そのことも含めてすべてのことが時になくなって美しいものであります」と話されました。私が話したみことばについて肯定してお話をされたことに驚きました。母の親戚は、「お坊さんは普段はあんなことは言わないのに、今日はいつもと違っていい話をしてくれた」と話していました。葬儀が終わってから、ベックさんのメッセージが収められた「永遠のいのち」の冊子を受け取ってくれました。父方の叔父の奥様からは、「いい話を聞かせていただいたて本当に良かった。今日来れなかった夫に、寛ちゃん今日はいいい話をしてくれた」と伝えまうと言ってくれました。司会進行を務めてくださった係りの方も、「知らないことが多いので勉強します」と、冊子を受け取ってくれました。

ことを知りました。それから天に召されるまで二度とお酒を口にすることはありませんでした。このことから、主は父を心配しててくださり、父が主の守りと、完全なる救いのご計画の中に導かれていたことに感謝致しました。

また両親が、鹿児島空港ホテルでの「喜びの集い」に私に会うために来てくれた時には、母は集会中は席を外していましたが、父は礼拝・福音集会と、席に座って聞いていました。父は戦後、英語の教師を目指して東京で学んでいた時に、聖書に触れたことを話してくれました。当時、救いには至らなかつたようですが、聖書に触れる機会があつたことを知って嬉しく思いました。

主よ。あなたは私の神。私はあなたをあがめ、あなたの御名をほめたたえます。あなたは遠い昔からの不思議なご計画を、まことに、忠実に成し遂げられました。

(イザヤ25・1)

しかし母は、相談もなく聖書の話をしたことに大変怒りました。その後母に、入院中の父と一緒にイエス様にお祈りしたこと、父もそれを受け入れてくれたこと、そして、イエス様のことを弟にも教えておけ、と言っていた事などを話しました。それから母は少しずつ理解を示してくれるようになり、今では一緒にみことばを読み、祈りに心を合わせてくれるようになりました。

イエス様は父の葬儀を、聖書のみことばを伝える機会として用いてくださり、祝福してくださったことに感謝致しました。

父は、お酒が入っていない時は真面目に働く優しい人でしたが、お酒を飲むと人が変わりました。昼間でも飲んで仕事をしない、お酒の為に借金する、その上飲酒運転で事故を起こし、断酒のために入院させられたりもしました。医師から、このまま飲み続けると死ぬと告げられても、お酒をやめられない。そんな父でしたが、私が就職のため上京してからしばらくして、お酒を断った

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。
(使徒 16・31)

これまでに祖母、伯父夫婦、叔父夫婦、妻の両親を、救いへと導いてくださり、天の御国に招き入れてくださいました。父より先に天に召された祖母は、私がイエス様を信じたことを告げると「それは良かったおめでとう」と喜んでくれました。そして一緒にみことばを読み祈りに導かれました。

伯母は祈りに心を合わせ、確信を持って「イエス様しかないでしょう!」と言われました。昔からイエス様を信じておられたことを知って驚きと共に、嬉しかったことを思い出します。伯母は家族の救いを祈っておられました。その後ご主人(伯父)も祈りに導かれました。今は天の御国で再会できる希望と主のあわれみに感謝しております。

私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。
(ピリピ 3・20)

後藤寛(ごとうひろし)

一九五八年、鹿児島県生まれ

鹿児島実業高等学校、中央商科短期大学(二部)

現在 会社勤務

妻 みわ子

長女 かおり

長男 誠(まこと)

次女 直美(なおみ)



苦難の日にわたしを呼び求めよ

柳奥 洋子

私は一九四二年九月四日、東京東玉川で、父星野光由、母春子のもとに、一男五女の末っ子として生を受けました。

私が胎にある七か月の時、母は重い肺炎になり、母体を助ける為に、胎児は締めてくださいと言われたそうです。母は絶対安静でしたので、看護婦さんを頼み、住み込んでいただき、その結果、私は臨月まで守られ元気で産まれたそうです。この方が、助かった赤ちゃんの命を大変に喜んでくださり、是非名前を付けさせて欲しいと言われるので、父は大変お世話になったからと、お願いし「洋子」と名付けられたそうです。ある時、父に對し名前について不満を言った事がありました。でも後に、「洋」は「サンズイ」に「羊」で、羊が水をくぐって新しく生まれたのだと気づき、それからは感謝と思える名前となりました。

あなたの目は胎児の私を見られ、あなたの書物にす



洋子さん(左)、亜紀子さんと

べてが、書きしるされました。私のために作られた日々が、しかも、その一日もないうちに。 (詩篇 139・16)

両親の愛情を受け、厳しいながらも甘やかされて育ち、人一倍自己愛と自尊心が強い、わがままな娘に育ちました。それでいて弱さも感じており、そんな自分にコンプレックスをもっていました。

私が高一の時、兄がカトリック信者の義姉と結婚し、その同居の日々の中で、その優しさに接し、信仰のゆえだろうとの思いで、信仰は良きものと、心に深く残りました。

私もいつ頃からか、他の人にはわからなくても、何かに心の中を知られている感覚になる時がありました。ただそれがどこから来るのかは分かりませんでした。そして自分の幸せは、両親の存在や環境にあると思ひ込み、それらが失われる事に、恐れを感じていました。

安心してわがままを言っていました。

しかし、後に信仰をいただいてから、夫と共に歩みたいと願った時、「信仰は心の問題だ」との拒否の言葉に大変なショックを覚えました。それから、協力はしてくれましたが、一番大切なところで共に歩めない年月が続きました。大分後になってからようやく、問題は、全く御心とは正反対の、私の自分本位の罪の性質であったと気づかせていただきました。今も相変わらずの者であると示されています。

「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるために来たのです。」

(ルカ 5・31、32)

九年間両親の近くに住み、その間に、長女英里子、次女亜紀子に恵まれました。長女の入園を機に、八王子

二十歳の時、小説『氷点』の中に、神様を、「大いなるものの意志」と呼ぶ表現に出会い、思わず「これ、これだ」と強く思った事がありました。しかし、深くは受け取れず、信仰には結びつきませんでした。ただ心に残りました。

短大を出て、東京丸の内の銀行に二年間勤め、その後姉夫婦の紹介で、主人和甫^{かずと}と出会いました。その婚約時代、家まで送ってくれた主人の帰る背中に向って、「神様っていらっしゃるんですね」と思わず言ったことがありました。主人は誠実で優しい人でしたが、それだけが理由で出たことばではなかったと思います。

私は、「結婚はわがままを受け入れてくれる人でなければ、私が不正直で不真実になってしまふ。それでは双方にとって幸せは長くは続かない」と、その時は真剣に思っていました。そして一年後に結婚へと導かれました。主人は、「自分は日本の古い男だけど、君に対して、理解のない夫ではいたくない」と言ってくれていたので、

へ引つ越しました。その様な日々の中で、ふと、「私には『さつき』も『今』も二度と来ないなどと、漠然とした不安を感じる時もありましたが、直ぐに忘れてしまいました。

次女亜紀子が、五歳位から、時々頭痛を訴えるようになり、体調も不安定で、いろいろ診てはいただいたのですが原因が分かりませんでした。はじめて眼科で診ていただいた時に、「早めに精密検査を」と言われ、驚きました。直ぐに主人の先輩の紹介で、日本で三本指に入るといふ脳外科医を訪ね、受診しました。教授は娘を五、六歩歩かせ、簡単な目の検査だけで「脳腫瘍です」と断定されました。その時の主人と私のショックは言葉では言い表すことの出来ない程のものでした。直ぐに精密検査をし、検査室の前のベンチで、二人共一言も言葉も出ず、私はただ主人の手を握りしめていました。教授に呼ばれた時、死の宣告を受けるのではと、恐怖と悲

憤感しかありませんでした。結果は、小脳腫瘍。「大変大きく、大人なら息が止まっていたでしょう。子供で骨が軟らかいので、後頭部に押され、何とか守られていました」との事でした。他で予約していた一か月後のCT検査までは「生きられなかったでしょう」と仰いました。直ぐ入院がベストだが用意もあるでしょうと、明朝の入院となりました。

その晩、主人は「家売ってでもどんな事をしてでも、亜紀子を助ける」と号泣しながら言いました。私は思わず、「今まで診ていただいた先生達を恨むのだけは止めましょうね」と泣きながら言いました。娘のためだったと思います。我が子にこんな深刻な病が与えられるなど想像だにしていなかった二人でした。

その夜、入院してすぐに剃る（そ）ることになっている娘の髪をなでながら、この頭の中に、そんなものが出来ていたなんて、と可哀想で、気づかれない様に泣きながら髪を洗ってあげたことは、忘れる事が出来ません。

十二月二十一日入院、年内脳外科の手術はすでに終わっていた為、大きな手術ですので決まるまでの日々、不安一杯でしたが、二十五日のクリスマスと決まった時はほっとしたのと、イエス様の生誕を祝う日だと嬉しかった様に思います。それから娘には誕生日は二つあるとずっと言っていました。

二十五日、六時間の手術が終わり、麻酔から覚めた娘と対面し、教授の「手術は成功です。良性でしたが、副都心のビル一つとった様なものです。私だからとれました」の言葉に、喜びの涙と共に、「有り難うございます」と主人と何度も繰り返し言っていました。四日後、ICUから病室に戻れ、ほっとしたのも束の間、下がった熱が上り出しICUに逆戻りとなりました。そして、三十九度の熱の中、脳脊髄液（のうせきずい）を管で外に出すという三時間の手術となりました。

高熱との闘いの日々が始まりました。間もなく、解熱剤も効かなくなり、全身を氷で冷やす日々。二十四時間

の点滴、手足の甲は青くなり注射針を刺す所もない程腫れ、小脳の傷の為、二十四時間のうつ伏せ寝、太い注射器で脊髄から液を抜き、菌の有無を調べるルンバーという検査、恐れて泣き叫ぶ娘に、何も出来ない親。その他どれ一つとっても苦しく、辛い事の連続でした。

それまでの人生で、嫌な事、辛い事から逃げていた私にとって、絶対に逃げる事の出来ない、大切な娘の命と真正面から向き合う日々となりました。幼い娘にとって、特に母親は絶対でした。院内の同じ病の四人のお子さんは、次々と召されていきました。命の火の消える瞬間は、どんな名医であっても、止める事の出来ない現実を思い知らされていました。主人も一日もかかず病院に来ました。

娘は熱が下がらず、一週間だけ新薬を管を通して直接頭に注入するという治療となりました。その物々しさに、不安が更に増しましたが、命だけは助かって欲しい、それだけでした。それでも熱は下がらず、命には

代えられないと、もう一週間だけ新薬を使う事となりました。そして、十四日目には、いきなりようやく平熱となったのです。それまでの日々、朝に「神様、亜紀子に今日一日快い日をお与えください」、夜には「お与えください有難うございました」と祈るようになっていました。もともと大きな願いがあるはずなのに、欲張っては聞いていただけにないような気がして、一日一日と祈っていました。

苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう。あなたはわたしをあがめよう。

（詩篇 50・15）

次の日、五十日ぶりに一般病室に戻れました。そして、二日後、「明日退院していいですよ」という教授の言葉に、「瞬声も出ず、「退院したくないですか？」と教授に笑われるほどで、「勿論したいです！」と、喜び一杯とな

りました。主人も、双方の両親も、にわかには信じられない様子で、その後、喜びの渦となりました。

まだ熱のずっと下がらずにいたある日、娘が私のセータのボタンをさわりながら、「お家に帰ったら、こういうのをボタン屋さんに買いに行こうね」と言った事がありました。そんな幸せな時が来たらどんなに嬉しいか、「行こうね」と言いながら、いったい、いつそんな時が来るのだろうか、半分期待、半分諦め^{あきら}に近い心境になった本当に辛い時でした。でも主にはご計画がありました。

「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。——主の御告げ。——それはわざわざいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。」

(エレミヤ 29・11)

その時が与えられたのでした。

退院の日、「今だからお話し出来ます。あの新薬で東大名誉教授のお孫さんは、知的障害となり、身長の伸びが止まってしまった人もいます。命には代えられないので、仕方なく使いましたが、亜紀子さんには、全く副作用が出ていません。奇跡です。そして最後まで菌は見つからず、原因不明の熱でした。」との説明をいただきました。後に主だと知りました。その後、亜紀子は卒園式、入学式、と休むこともなく、順調に小学校生活が与えられて行きました。

「わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。」 (エレミヤ 33・3)

四か月後、大学の授業で亜紀子の症例を紹介させて欲しいとの電話をいただき、授業に参加しました。亜紀

子は階段教室の講壇に立ち、その後のスクリーンには、すでに娘のカルテや資料が写し出されていました。間もなく、「お母さんのところへ」とうながされて最上段の私の所に足早に上って来た時、学生の間から、大きな拍手が湧き上がりました。今までこんなプロセスで、こんなに元気な子供はいなかったそうです。さらに、亜紀子が高一になった時、この症例を世界脳外科学会で使いたいので、現在の写真が欲しいとの事でした。その時娘は百六十六センチとなっていました。

退院した頃、近くのクリスチャンホームの方から、集会へのお誘いがありました。娘が元気になっていましたので、お断りしていました。でも術後一年目のクリスマスには、感謝したいという思いになり、集会に集いました。終わった後、涙して祈ってくださいました。心がふるえるような感動を覚え、ここには私の知らない何かがあると思われ、時々集うようになりました。

7人の証し

Unser Herr lebt

その後、ベック宣教師がいらしていた集会に誘われました。そこで伝道の映画を見、ベックさんとお交わりの時が与えられ、何も分かりませんでした。ただ、わがままな人間の為にイエス・キリストが十字架にかかってくださったとの話しは、愛してくれた父と重なり、心にスーッと入りました。又ある時、「宗教」は人間の作ったもの、「聖書」は天地万物を造られた神のことば、信仰は弱い者が強い方に頼ること、「赤ちゃんは親の事を何も知らないけど安心して抱かれているでしょう?」とのメッセージに、「それなら神様だ」と、目からうろこが落ちるような思いとなり、しばらくして吉祥寺キリスト集会に集うようになりました。

その後に、受洗^{あづか}にも与り、ニューヨーク、ドイツ、スイスなどでの集いに実姉や、二人の娘と後に主人も共に行く機会も与えられ、それぞれベックさんとお交わりもいただきました。それからは楽しい、感謝な信仰生活を送りましたが、いわゆるお散歩のような信仰生

活だったと今は思います。でもその時は、これがクリスチャン生活だと思っていました。鈍い者でした。

次女が社会人になった二十三歳の時、頭痛が時々あるので、ビルの一階のクリニックでMRIの受診予約をしたとの事、以前の事をきちんと話すようにとは言いましたが、術後十八年も経っていたので、あまり心配はしていませんでした。

検査当日、私は集会の帰りに、神様は「エッ？」と言うような思いがけない事をなさるとの思いが湧き、「私は病氣より健康が良き事と思うような不信仰な者です。すべてを御手から受け取らせてください」と祈りながら帰宅すると、家に居るはずのない娘が泣きながら抱きついて来ました。泣きじゃくり、検査の結果、緊急入院、手術が必要、目が見えなくなり、歩けなくなる、他にも言われたそうで、明日一番で、フィルムと紹介状を持って大学病院に入院するようにとの事でした。

私は娘を抱きしめながら、「大丈夫、これ絶対イエス様からだから」と何回も言っていました。勿論大きなショックでした。夜祈りながら入院の仕度をしている時、内側から突然、「ウキッ」という様な喜びに近い思いがよぎりました。このような状況の時だったにもかかわらず不思議でした。

翌朝、娘の会社に休職する旨の電話をした時、「当社は医療機器の専門商社で、大学病院へも納入しているのでお力になれると思います。フィルムと紹介状を持って会社まで来てください」との事でした。

結果的に、八王子に近い「杏林大学病院はいかがでしょうか。あそこの院長は脳外科の権威です」と仰って、会社の方がすべての手続きをしてくださり院長の三日後の予約もとってくださいました。杏林大学病院は、吉祥寺キリスト集会から近く、ベックさんにもいらしていただけると、前日からずっと祈っていた病院でした。その日家を出る時、「あなた様は、必ず亜紀子に最善を

お与えくださいますね。全てをおゆだね致します」と手放した結果与えられた病院でした。主のなさることに驚き、初めて涙が出ました。勿論、感謝と安堵の涙でした。

大学病院のMRIの予約の日を待つ間、もしイエス様が、「わたしの大能の力を見せるから、娘にこの事を与えてよいか」と仰ったら、即座に、「それだけは絶対にいやです。止めてください」と叫んだに違いない不信仰な者でした。かつての苦しみを味わってしまった私には、こんな弱い信仰では耐えきれない、まして、年頃の娘に二度とあの様な思いはさせられないと必ず叫んだに違いありません。

でも与えられてしまったのです。「もう、イエス様におすがりする以外にない、イエス様の大能のお力を体験させて頂けるかもしれない」と、祈った結果、「ウキッ」とよぎったのは聖霊様がくださった喜びであったと後で気づきました。又ベックさんの福音メッセー

ジのテープで聞いた、「ハエも飛行機に乗れば、ドイツに行けるよ」に、かつての私は、自分のひ弱な羽根で海を渡らなければならないのか、ちぎれて海に落ちるのではないかと、ただ恐れと不安の中にいたハエだったと気付きました。今は、イエス様号のジェット機のファーストクラスの真白なカバーに止まる事も許されている「ハエ」なのだと思いき、不思議な程の平安をいただきました。

しかし神は、知恵ある者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。(1コリント 1・27)

大学病院での三回の検査の結果、院長から「先の手術の後遺症だが、手術が大変上手だったので、全く心配ありません」と仰っていただきました。



光枝さん(右)、善正さんと

主があなたとともにおられる

中谷 光枝

わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。
(2コリント 12・9)

振り返れば、みことば一つ知らなかった者にも、苦難の時にわたしを呼び求めよと仰ってくださいだったイエス様、生ぬるい歩みの時にも、叫びの小さな祈りを聞いてくださったイエス様、この世にお一人子をお与えくださった父なる神様、この鈍い者に語り続けてくださったいる御霊様、何故こんな者に、こんなに良くしてくださいるのですか、とお聞きする時、「あなたが、母の胎にある時からずっと見ている」とおっしゃってくださいるイエス様、この恵みに感謝で一杯となります。

主人も三年前に、イエス様を信じ、主にある兄弟としていただき、共に祈る者としていただきました。ただ感謝しかありません。

柳奥 洋子（りゅうおくようこ）

共立女子短大国文科卒、三菱信託銀行丸の内支店勤務

夫 和甫（かずとし）

長女 英里子

次女 藪野亜紀子、夫 藪野拓也（ベックさんの司式で結婚へ導かれた）

御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。

（ローマ 8・26）

イエス様との出会い

一九八四年十月十六日、ベックさんを通して初めてイエス様に出会いました。それは信仰を求める思いの全くなかった私にとって何が起こったのか分からない不思議な喜びの体験でした。溢れる涙を自分でも説明がつかず、ベックさんの「おめでとう！」の言葉に戸惑うばかりでした。けれどもその日、ベックさんが語られた「私自身が罪人であること、イエス様の十字架は人の罪の赦しのため」などは、いつも自己嫌悪の中にあった私のための神様からのお応えのような気がしました。

た。罪人の私のために、その罪を贖うために身代わりとなつて十字架にかかり死んでくださったイエス様。理解は出来ませんが、真の神の存在を少しづつ意識するようになつて行きました。

それから長い時を経て、聖書のみことばと賛美は日々の生活の中で静かな安らぎとなり、イエス様と永遠に共にある希望の満たしは、イエス様の再臨を待ち望む祈りとなりました。

祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現われを待ち望むようにと教えさとしたからです。

(テトス 2・13)

家族や友人知人にもイエス様の救いを受け入れて欲しいとの願いが強くなりました。

姉の救いと召天

その後、姉中川幸子が末期がんであることがわかりました。姉は若い頃から信仰の場を求めておりました。ところが姉がたどり着いた所はある宗教家の偶像を礼拝する所でした。

御代田でベックさんとお交わりしていただいた後も「あなたはあなたの神様を信じなさい、私は私の神様を信じるから」と言うだけでした。

入院先の病院で姉と共にイエス様に感謝のお祈り、悔い改めのお祈りを捧げても、別れ際はいつも「あなたはあなたの神様を信じなさい、私は私の神様を信じるから」でした。私はいつもみじめな敗北感だけでした。

さらに病状は進み治療方法もなくなりました。その頃から「何故自分がんになったの?」「死とはどんなもの?」「聖書には何と書いてあるの?」と尋ねてくるようになりました。気持ちが楽になると言ってみことばを沢山書いて送って来てくれました。それでも姉

と話した後の言葉は「私は私の神様を信じる」でした。

まもなく義理の兄から個室に移されたこと、あと一週間もたないかもしれないと連絡が入りました。福音を伝えることも何も出来ない私は、ベックさんに姉のところに行つていただきたいと切に思いました。当時ベックさんは力強いメッセージは続けてくださいましたが、からだはかなり弱つておられました。とてもベックさんをお願い出来る状況ではありません。

途方にくれる私に「御霊に満たされなさい」とのみことばが迫ってきました。その時、「私自身がベックさんのように御霊に満たしていただければいいのだ」と思わされました。すぐに祈りました。歩きながらも電車の中でもひたすら「御霊に満たしてください」と祈り続け、病院に向かいました。病室の前で「今こそ私のすべてをイエス様に明け渡します」との祈りにも導いていただきました。

病室で姉は一人静かに眠っています。姉の隣で祈り

ました。十字架の贖いに感謝し、よみがえられたイエス様に、姉にも永遠のいのちを与えてくださるようにと声を出して祈りました。すると「アーメン、アーメン」と言う姉のか細い声が聞こえてきます。両手を上に伸ばし祈りに合わせ、しばらく出すように「アーメン、アーメン」とやっと聞き取れる声でしたが何回も繰り返します。

次に集会の歌集『日々の歌』の中から賛美しました。今度は「有難う、有難う」という声がはつきり聞こえます。姉は眠ったかと思うと、再び目覚め、同じようなことが二時間の間、何度も繰り返されました。病室の中はイエス様と姉と私の三人だけの世界でした。聖霊が満ちているようです。それから二日後姉はイエス様のものと旅立っていきました。

葬儀の日、甥と姪から「臨終が近づいた時、家族が揃っている所でおばさんの名前ばかり呼んでいた」と聞かされました。甥に「何故おばさんの名前ばかり呼ん

7人の証し

Unser Herr lebt

でいたのか分かりますか？」と尋ねられ、姉との最後の交わりの時の証しをする機会もいただきました。

あの時、私の内で生きて働いてくださったイエス様に姉は出会い、救いに導いていただいたのだとはっきり確信することが出来ました。

後にイエス様は教えてくださいました。私は無きに等しい自らの信仰や体験談を語り、姉を説得しようとしていたのです。でも、姉が本当に必要とし求めているものは、イエス様の十字架とよみがえりの証しだけだったのです。私がどんなに無力でみじめでもイエス様はすべてを益とし最善に導いてくださいました。イエス様は御霊の力によって、姉にかかわるすべてのことを成し遂げてくださったのです。

十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。

(1コリント 1・18)

やがて診察やリハビリのために来られる看護師さん達は、話すことも身動きも出来ない患者の枕元に置かれた分厚い本がたいそう気になられたようです。後日、ページを開かれた方々から「すごい本ですね」「ずっと気になっていましたが、これは何ですか?」「これ、読んだのですか?」など反応は様々でしたが聖霊によって関心を持たれるようイエス様が働いてくださった事が分かりました。私の事をよくご存じのイエス様は口を開けば、つまずきしか出て来ない私の口をあえて閉ざし、主人をイエス様の道具として用いてくださり、ご自身のみことばを直接多くの魂に取り次いでくださったのです。

主が私たちのために死んでくださったのは、私たちが目ざめていても、眠っていても主とともに生きるためです。

(1テサロニケ 5・10)

私の神、主よ。私はとこしえまでも、あなたに感謝します。(詩篇 30・12)

私に与えられた病と主の導き

私は二〇二〇年十二月三十日早朝、突然くも膜下出血で倒れ救急搬送されました。直ぐに治療、手術が施されましたが、合併症などで二か月程は意識障害を起し、記憶はほとんど残っておりません。

その様な状態の中、まだイエス様を信じていないはずの夫が、私が日々使っていた聖書を病院に届けてくれました。コロナが猛威をふるっていましたので面会もかなわず、「目がさめたら直ぐにわかる所に置いてください。これを見つけたら喜ぶと思いますから」と言って、受付のスタッフに聖書を託して帰ったそうです。聖書は私の枕元に置かれました。イエス様は何も分からない私の枕元でみことばをもって見守り続けてくださいました。

二〇二一年三月一日、釘で全身を刺されたような激しい痛みと高熱で目が覚めました。耐え難い激しい痛みと朦朧とした意識の中で、「イエス様がおられる! イエス様は生きておられる」と心の中で叫びました。それは確かなことでした。

数日後、熱も下がり自分の置かれている所が自宅ではなく、リハビリ病院であること、病気のこともしだいにハッキリして来ました。要介護四に認定されていたこと、枕元に置かれた聖書にも気が付きました。最初に開いたみことばはコリント人への手紙第二の6章でした。2節『わたしは、恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた。』確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。』

このみことばで「今はまだ救いの恵みは残っている。そして、イエス様は間もなく来られる」と確信しました。同室の患者さんに目が止まりました。長い間家族に会えない寂しさと自分の足で歩くことのできない不安

で度々スタッフを呼び出していました。

私とも話すようになり、自然とイエス様の話に導かれました。「いつも私と共におられる神様はあなたとも一緒におられ、私たちを心配して守ってくださいます。だから心配しなくても大丈夫。安心してください」彼女にはそれだけで充分でした。素直に聴いてくださり、うなずいて受取ってくれました。ナースコールもなくなりしました。私の内に住まれる御霊の慰めは、孤独や不安からの解放になりました。

長い入院生活の中で患者さん同志の交流も増してきました。多くの方が突然動かなくなった手足に「何故、自分がこんな事になってしまったのか?」「これから先どうしたらよいのか?」「なぜ?どうして?」という答えのない問いに辛い葛藤が続きます。その中で、私もみことばを彼らに語り掛けました。

わたしがしていることは、今はあなたにはわからない

が、あとでわかるようになります。(ヨハネ 13・7)

神は：耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。(1コリント 10・13)

この時は私自身がみことばによる慰めを必要としていたのかもしれませんが。次々とみことばがその場に依じて導き出されました。

大きな病を受けると自分の力では何も出来なくなります。全く無力にされた時、イエス様にすべてを明け渡しイエス様だけを頼る者とされます。イエス様との距離が近くなりリハビリでも必要な助けを随所で与えていただきました。

イエス様は主人と息子からも祈りを導き出してくださいました。そして彼らの願いをはるかに超え、祈りに

応えてくださったのです。死に至る確率も高く、障害が残る確率も高い病気にも関わらず、イエス様は沢山のお祈りによって私たち家族に主の栄光を現わしてくださいました。まもなく補助なしで自分の足で歩けるまじになりました。誰もが驚くような回復の速さでした。

けれど同時に一番の邪魔者は私自身のおごりと自己よがりの判断でした。自らの力や考えで行動したり、悩んだり心配しているとイエス様への信頼は弱まり平安もなくなり不安になります。そのような時、すぐにリハビリにも影響が出ます。私がどんなに弱く辛くとも立ち直れるのは主の御霊のいのちが私の中にあって支えてくださり、主のよみがえりのいのちの力を、ただ信じておゆだねすることだけでした。

救急搬送から四か月、あと一週間で退院となった時、一般病室から広々とした明るい特別室に移されました。担当スタッフに事情を尋ねました。「あなたは他のみんなを励まし慰めてくれました。このことは私達の気持ち

ちです。」思いもよらないスタッフの^{いた}えでした。主は私に気が付かない時も共にいてくださり、みことばを通して神の愛と恵みを運んでくださったのです。この病気を通して出会わせていただいたお一人お一人が、主に重荷を降ろされ、永遠の救いに導かれる事を祈り続けております。病まなければ分らないイエス様の^{あはれ}憐れみと慈しみに感謝致します。

主ご自身があなたの先に進まれる。主があなたとともにおられる。主はあなたを見放さず、主はあなたを見捨てない。恐れてはならない。おのいてはならない。

(申命記 31・8)

主よ。私は、あなたに信頼しています。私は告白します。「あなたこそ私の神です。」(詩篇 31・14)

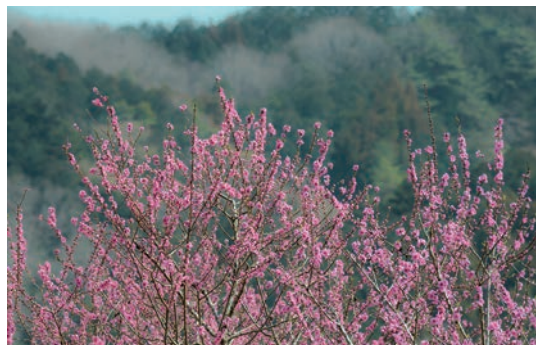
中谷 光枝（なかにたに みつえ）

一九四九年 東京生まれ

十文字女子中学校、高等学校、短期大学卒業

夫 中谷 善正（よしまさ）

長男 和正（かずまさ）



ここまで主が導いてくださった

古畑 晶



晶さん(左)、陽子さんと

生まれる前から、私はあなたに、ゆだねられました。
母の胎内にいた時から、あなたは私の神です。

（詩篇 22・10）

私は、一九五〇年に東京の下町に生まれ、育ちました。
古畑又平、敏子の五人兄弟の末っ子として、甘やかされて育ちました。幼いころの私は人のかげに隠れ、目立たない存在でした。何の苦勞もなく、特別な目的もなく生きていました。しかしそんな私にとって、死がとてつもなく恐ろしいものになりました。「生まれる前は、どこにいたのだろうか。死んだらどうなるのだろうか。」そう考えると夜も眠れませんでした。当時の私にとって、現実の世界、目に見える世界、手で触れる世界がすべてでした。霊の世界、永遠の世界の存在など、思いもよらないものでした。

小学校四年生のとき、母親が交通事故で寝たきりに

なっていました。私の人生は一変しました。何事も自分でやらなければなりません。だれも手伝ってはくれないと思って嘆くだけ、物事に積極的になれず、自主的に行なうことのできない者でした。空しい時間が経過していくばかりでした。

空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。日の下で、どんなに労苦しても、それが人に何の益になろう。

(伝道者 1・2、3)

高校受験も何とか切り抜けて、私立高校に入学しました。入学するとすぐ、部活の勧誘にあい、断れない性格の私は、運動をしたこともないのにバスケット部に入部しました。それからというものの放課後はもちろん、土日も練習試合と、まさにバスケットづけの毎日で、勉強はおろかプライベートな時間のないハードな生活を送りました。しかし、こうした日々はそれまで苦勞らし

い苦勞をしたことのない私にとって、貴重な経験となりました。

高校三年生になると、進路を考えなければならませんでした。受験勉強も十分でなかったのに、何と医学部を選択したのです。母の病気のこともあり、人の役に立つ仕事に就きたい一心でした。現実をあまり深く考えることもせずに医学部を目指し、はたせるかな、浪人生活を送ることになりました。

この浪人時代に、いろいろなことを学びました。自分の人間形成も、この時になされたといっても過言ではありません。真剣に勉強に取り組み、恋愛もしましたし、旅もしました。あちらこちらの大学を受験しながら、日本中を旅行しました。また、いろいろな人との出会いもありました。

始めのうちは、自分の思い通りにいくはずだと頑固に頑張り通しました。神を知らず、神を恐れない傲慢な私はへりくだって考えることのできない者でした。結

局、どうしても目指す医学部には入れず、進路変更を余儀なくされ他学部を受験しました。大学時代、教職をとっていたので、数学の教師を目指すことにし、教員免許をとりました。本格的に数学を教えるためには、数学が好きだけではだめで、しっかりと勉強していかなければなりません。教員をやりながら、勉強をつづけました。

主を恐れることは知識の初めである。愚か者は知恵と訓戒をさげすむ。

(箴言 1・7)

心を尽くして主に抛り頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。

(箴言 3・5、6)

話は戻りますが、私は東京の生活が嫌いでした。騒がしく、空気は悪く、ビルばかりの空の見えない都会は居

心地の悪い場所でした。私の両親は、長野県出身で、夏休みにはいつも親の実家に行っていました。そのつながりで、学生時代はよく長野に行ったものです。後に思うことではありますが、山があり、川があり、自然豊かなところで、神を感じないわけはありません。神を知らない者にも、自然を通して神が語りかけてくれていたように思います。

私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。私の助けは、天地を造られた主から来る。主はあなたの足をよろけさせず、あなたを守る方は、まどろむこともない。見よ。イスラエルを守る方は、まどろむこともなく、眠ることもない。

(詩篇 121・1～4)

大学に入った頃、長野に遊びに行くために列車に乗りました。列車は、帰省客で混雑していました。通路も

人でいっぱいでした。たまたま乗り合わせた列車の中で、今の妻に出会いました。何か話しかけたい衝動にかられ声をかけると、東京のキリスト教の大学で学んでおり、家に帰る途中であるとのことでした。その後、何回か会う機会が与えられ親しくなり、大学を卒業した後、結婚することになりました。

この出会いが、私にとって神様が備えてくださった運命的なものとなりました。

主はこう言われる。さまざまな道に立って、眺めよ。
昔からの道に問いかけてみよ。どれが、幸いに至る道かと。その道を歩み、魂に安らぎを得よ。

(エレミヤ 6・16 新共同訳)

彼女は大学時代に、人生に悩み、神様に頼る道を選びました。大学卒業後は、大学教会の仕事につきました。私は必然的に、日曜日は大学教会に通うようになりま

した。これが、私が初めてイエスさまを意識するときとなりました。

あなたがたがわたしを選んだものではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。

(ヨハネ 15・16)

三十歳近くになるまで、私自身はイエスさまの教えに触れる機会はありませんでした。信仰に巡り会う機会がありませんでした。自分は無宗教であると信じていて、宗教に頼る者は弱い人間であり、自分に力がないから神に頼るのだと思っていました。また、科学万能の時代に、神がしてくれるというより、自分がすべてを生み出していくのだと思っていました。どんな病気でも、必

ず自分が治していくのだと信じていました。自分が、何もできない弱い存在であることもわからずにいました。

結婚する直前に、彼女が勤務している大学教会の教会員の方からお話がありました。二年前に大学の系列高校ができたこと、そこで数学科の教員を募集しているとのことでした。心を引かれる話でした。何も考えずに応募することにしました。後で聞いた話では、たいへん難関であったとのことでしたが、何とかその高校の教員になることができました。自分の力では、とてもかなわないことですが、主がしてくだされば必ずことがなされるということに、まだ不信仰な私は気づいていませんでした。

一九八〇年、四月キリスト教高校の教員としてスタートすると同時に、結婚することになりました。また、この年の十二月に大学教会にて洗礼を受けさせていただきました。今までの自分の人生よりも、主がともにいてくださる人生の方が幸せになれると信じて、洗礼を

受けました。

何もわからずに、教会の一信徒になったのですが、その後日曜学校の教師として子供たちに聖書のお話をしたりすることが自分の学びとなりました。学校では、クリスチャンの先生がたや、信仰に目覚めて行く生徒たちとの交わりを通して、徐々に信仰が養われていったと思っています。

埼玉に引っ越すのを機会に、大学教会から別の教会に移りました。しかし、その頃は自分を中心とした信仰であり、神を中心の信仰とはなっていない感でした。教会では、「信仰の幼子」という言葉が語られ、いつまでも成長しない信仰者をそう呼んでいたのです。また、中にははつきりと自分が信仰に目覚めた日には驚きました。聖霊に満たされた自覚を持っている人もおり、聖霊に満たされた実感のない私にとっては肩身の狭い思いをしておりました。そうした実感を持ち、感情

的に満たされる信仰にあこがれているようなところがあつたような気がします。聖霊に満たされて、神の働きがあれば、今までの弱い自分が一変して強い自分に生まれ変わることができるのではないかと思っていました。これはすべて自分の思いであり、聖霊に満たされるのは、神の一方的な愛であることを悟っていませんでした。しかし、キリスト集会に来て、証し集『光よあれ』や『主は生きておられる』などを読み、信仰の兄弟姉妹と交わるうちに、イエスさまに従っていれば、すべてイエスさまがなしてくれるのであり、自分が強くなる必要がないことをはっきり知るようになりました。頼っている神様が、圧倒的に強いからです。

主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私はキリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さ

自由になっていた気がします。今は、自由で、主がすべてをなしてくださるので安心していきます。自分自身に、良いところも悪いところも存在するけれども、それらすべてをわかったうえで、イエス様は私を愛してくださいることを実感しています。

あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。
(ヨハネ 8・32)

高校の教員として三十五年間、定年まで働くことができました。神様が備えてくださった高校でした。主の御名によって建てられた学校でした。神と人々とに奉仕する生徒を育み、世界人権宣言を尊ぶ学校でした。同僚には数学の知識が豊富で、学ぶことに熱心な教員がたくさんおられました。また、開校したばかりの学校であり、教員も生徒も新しいことのできる場所でした。生徒を教える行く数学の知識も、生徒を指導して行く指

を誇りましょう。

(2コリント 12・9)

聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。

(使徒 1・8)

信仰をもって三十五年目の二〇一三年に、地域の教会から川越キリスト集会に移りました。妻は、教会とキリスト集会の違いを感じて、キリスト集会に移ることを強く希望しました。私は、イエス様を信じているのならどこに行っても変わらないと思いましたが、夫婦別々の場所に行くよりは同じキリスト集会に行くことを選択しました。

今考えると、キリスト集会に来て良かったと思っています。今まで、あれはやってはいけない、これはやらなければならぬと、自分の思いで制限を設け、自分で不

導力も、キリストを伝えていく信仰も鍛えられた場所でした。生徒とともに聖書研究会を開き、夏には北海道や離島へバイブルキャンプに行つて、夜遅くまで話し合ったりもしました。いろいろな人を招いて、聖書講演会も持ちました。ベック宣教師ご夫妻にもおいでいただき、生徒たちにイエス様のことを話していただいたこともありました。

思い通りにいかないこともたくさんありましたが、主が助けてくださりここまでくることができました。

そこでサムエルは一つの石を取り、それをミツパとシェンの間に置き、それにエベン・エゼルという名をつけ、「ここまで主が私たちを助けてくださった。」と言った。

(1サムエル 7・12)

退職後も子供たちとの関わりを持ちたいと、いろいろなことにチャレンジしています。生涯、主イエスさま

と生きる喜びを、すべての人と分かち合いたいと思っています。

古畑 晶（ふるはたあきら）

一九五〇年三月 東京都台東区上野生まれ
千代田区立千桜小学校・今川中学校、私立成城高等学校、慶応義塾大学工学部機械工学科卒業
国際基督教大学高等学校数学科教諭、新島学園中学・高等学校校長

妻 陽子（ようこ）

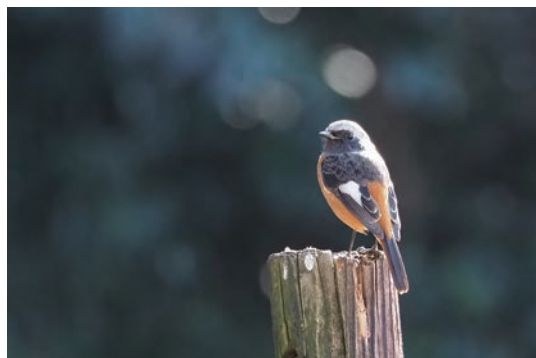
長男 牧人（まきと）

次男 直樹（なおき）

長女 愛実（まなみ）

三男 義矢（よしや）

孫4人



イエス・キリスト、真理と喜びの道

古畑 陽子



陽子さん

天の御国は、畑に隠された宝のようなものです。人はその宝を見つけると、…持ち物を全部売り払ってその畑を買います。
（マタイ 13・44）

今私は、主の救いをいただき、生きる意味を見出し、日々感謝する者とされていますが、ここに至るまでは紆余曲折、長い時間を要しました。イスラエルの民がカナンの地に到着するのに、四十年の荒野の旅を要したように。

回心と十字架。私には二つの大きな転機がありました。

生い立ちと回心

私は一九五三年、長野県上田市で、父内藤清重、母秋治の長女として生まれ、三歳違いの妹育代と四人家族で育ちました。父母は働き者で優しく、叔母たちも近所

に住んでおり、愛されて育った子供時代でした。しかし、私が十一歳の春、母がくも膜下出血で倒れたことで、我が家の生活が一変しました。その後母は長い間不自由な体で過ごし、五十五歳で召されました。父はその母の闘病を支え、先祖から受け継いだ田畑を守りながら、兼業で会社勤めをしつつ、懸命に私たち姉妹を育ててくれました。今私は、父の大きな愛を思い返すたびに感謝してもしきれない思いですが、当時は、父の大変さを思いやるところか、元気なお母さんがいる周りの友人たちをうらやみ、やりたいことができないなど不平不満を持っていました。

自己実現をよしとする戦後教育の中で、このままでは、自分の将来に希望がもてないと思ひ込み、大学に行けば何かが変わるのではないかとほつきりとした目的もないまま、希望の大学を受験し合格しました。父はそんな自己中心な私を静かに見守ってくれていました。――その父は後に、病床でベック宣教師のお見舞いを

いただき、ベック兄弟(以後そのようなに呼ばせていただきます)のお祈りに大きな声で「アーメン」と心と声を合わせ、二〇一五年に穏やかに召されていきました。

このようにして大学入学を機に東京に來たことも、主に出会うための私の道であったと後になって気づきました。それまでも、折々にイエス様のお話を聞く機会がありました。イエス様との個人的な出会いにはありませんでした。

大学生活が落ち着いてくると、自己実現を求める世界の冷たさ、虚しさを感じるようになりました。夢に描いていた理想の環境にもかかわらず、結局、ここでも私自身の心は晴れることがなく、暗闇であり、希望を持つて生きるいのちはありませんでした。田舎では、束縛はあるものの温かい家族がありました。そこから離れて、私はいったい何がしたいのか、人としてどう生きるのが幸いなのか、と問うようになり、その指針を求めて、キリスト教系の人生哲学書やバツハなどの宗教曲に心

を向けるようになりました。しかし、頭で考える哲学ではかえって混乱し、理想を描いてもそれを実現する力のない自分に、落ち込み生きる氣力を失っていました。「私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです。」(ローマ7・15)

そんな暗闇の中で聞こえてきたのは、どこかで聞いた「神は愛なり」という聖書の言葉でした。みことばに押し出され、神様に心を開くと、スーッと明るい光が心に差し込むのを感じました。私が求め続けてきた明るい希望の世界です。答えは神様だと気づきました。人生の意味、生きる力や喜びは物や言葉や知識ではなく、天地を造られた神、イエス様のもとにあることがわかりました。

わたしが來たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。(ヨハネ 10・10)

愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。(1ヨハネ 4・8)

神は愛です。愛のうちにいるものは神のうちにあり、神もその人のうちにおられます。(1ヨハネ 4・16)

自分を見つめることをやめ、神様に心を開いたことで、人生の宝を見出し、空しい人生から解放されました。しかし、この時はまだイエス様の十字架が私の罪のためであったことを理解していませんでした。

十字架の主との出会い

その後、洗礼を受けて教会生活をするなかで、私はキリスト者との結婚を望むようになりました。当時お付

わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。

(ヨハネ 14・6)

7人の証し

Unser Herr lebt

き合いしていた夫は、結婚を機に、キリスト信仰を真剣に考え、イエス様を救い主として信じ受け入れました。信仰を共にする夫と、教会中心の生活をする中で、三人の男子と一人の女子を授かりました。教会では親に従うこと、信仰の継承が当然のように語られていました。

私は、教会のクリスチャンホームのお子さんたちが素直に信仰を受け継いでいる姿を見て、我が家の子供たちも信仰を受け継いでほしいと願っていました。しかし、私の思いが強ければ強いほど、子供たち、特に長男は反発しました。彼ら自身の悩みや葛藤には気づかず、なぜ親に従えないのか従わない子供たちが悪いと責めていました。救いは主のものであるにもかかわらず、間違った使命感にかられ、傲慢にも自分で何とかしなければと思い込んで、そうできない自分に悩んでいました。今思えば、私自身がイエス様の十字架の意味もわからず、救いを体験していなかったのです。ほんとうに申し訳ないことをしてしまいました。そんな時、「また、わ

の罪ではないか。主に仕えるためと言いながら、かえって主を苦しめていたのではないかと気づきました。

わたしを信じるこの小さい者たちのひとりにでもつまずきを与えるような者は、大きい石臼を首にかけられて、湖の深みでおぼれ死んだほうがましです。

(マタイ 18・6)

子供たちと過ごした貴重な時間を失ってしまったことに気づくと、取り返しのつかない自分の罪の重さに苦しくなり、自分ではどうすることもできない、ただ赦されなければ前に進めないと思いました。その時、イエス様の十字架が私の罪を赦すためであったことがわかりました。「イエス様、ごめんなさい。子供たちに愛のない母でした。罪深い私を赦してください。子供たちをイエス様にお任せします」と祈ると、それまで私を苦しめ続けていた重荷が取り去られました。その当時、長男は

たしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。」(マタイ10・37)というみことばがしきりに語りかけてきたのですが、何故そうなのかわからずにいました。私は子供を手放すことができなかったのです。

わたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、畑を捨てた者で、その百倍を受けない者はありません。…後の世では永遠のいのちを受けます。

(マルコ 10・29、30)

子供たちの年齢が上がり、それぞれ教会から離れてしまつて、私は悲しみでいっぱいになり自分を責めていました。そんな折、ふと、私がしてきたことは何だったのかと自身の在り方を省みる思いが与えられました。結局は、自分勝手な信仰の押し付けであったこと、彼らを自分の思い通りにしようとする傲慢な心、これは私

既に大学生になっていました。

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。(1ヨハネ 1・9)

子供たちは、四人とも幼児洗礼は受けているものの、未だに信仰告白には至っていません。しかし、こんな頑固な私を愛し続け、救ってくださった主は、親以上に彼らを深く愛してくださる方ですから、神様の時に救いを成し遂げてくださると信じて祈りつつ待ち望んでいます。

主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。(ルカ 1・45)

わたしのことは、その時が来れば実現します。

7人の証し

Unser Herr lebt

(ルカ 1・20)

祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。

(マルコ 11・24)

集会へのお導き

私たち夫婦は三十年以上、ある教会に集っていました。私にとっては、教会こそが心の拠り所で、はじめのうちは教会生活に喜びや希望がありました。けれども、だんだん義務的になり、主から心が離れて、人を見るようになり、いつの間にか形式的な信仰者となっていました。子供たちのこともあり、このままの信仰生活でいいのだろうか、と疑問をいだきつつ何年も悶々^{もんもん}と過ごしていました。

人は、たとい全世界を手に入れても、まことのいのち

を損じたら、何の得がありません。(マタイ 16・26)

そんなある日、敬愛する姉妹のお導きによって、ベックご夫妻や集会の主にある兄弟姉妹とお会いし、「喜びの集い」や学びの機会をいただきました。そうして約一年間、前の教会での礼拝を守りつつ、祈り求めていた中で、喜びを失っていた私に、主は「初めの愛に戻りなさい」と語りかけてくださり、ご聖霊によって集会に導いてくださいました。今は、夫婦で川越キリスト集会に集い、兄弟姉妹と共に、ただ主だけを見上げる信仰によって生かされ感謝しています。

最近の恵み

夫の品^{あきり}はICU(国際基督教大学)高等学校を退職後、クリスチャンの友人からのご紹介で、二〇一九年から四年間群馬県安中市のミッション系中高一貫校の校長として奉職しました。私も共に群馬県に移住しました。

(コロサイ 3・18、19)

最近励まされている聖句

日々の生活の中で心が暗くなる時、私のいのちは神様のうちにあることを思い起こします。そして主は最善のみをなさる方であることを信じ、御声に耳を傾けつつ歩めること、これが最高の喜びです。

あなたがたはすでに死んでおり、あなたがたのいのちはキリストとともに、神のうちに隠されてあるからです。
(コロサイ 3・3)

いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているものは愛です。

愛を追い求めなさい。(1コリント 13・13、14・1)

妻たちよ。主にある者にふさわしく、夫に従いなさい。夫たちよ。妻を愛しなさい。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてく

7人の証し

Unser Herr lebt

ださったことを何一つ忘れるな。主は、あなたのすべての
の咎^{とが}を赦し、あなたのすべての病をいやし、あなたのいの
ちを穴から贖^{あがな}い、あなたに、恵みとあわれみとの冠を
かぶらせ、あなたの一生を良いもので満たされる。

(詩篇 103・2～5)

あなたがたは、以前は神の民ではなかったのに、今は
神の民であり、以前はあわれみを受けない者であった
のに、今はあわれみを受けた者です。

(1ペテロ 2・10)

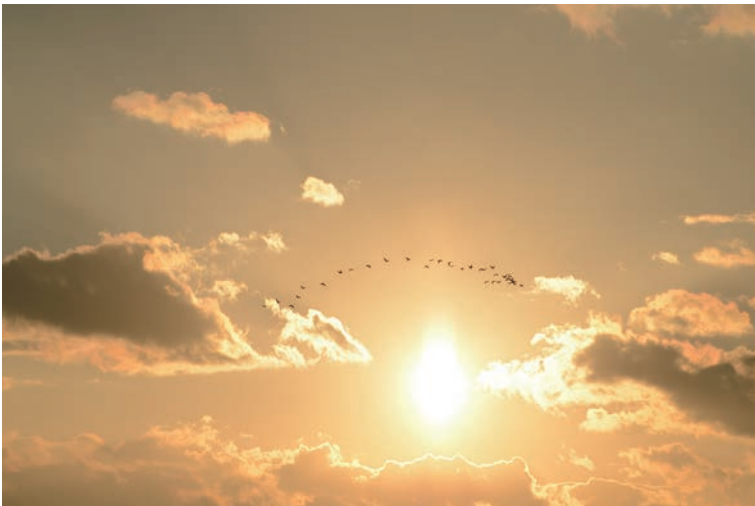
古畑 陽子(ふるはた ようこ)

長野県上田市立中塩^{なかしおだ}田小学校、塩^{しおだ}田中学校、上田染谷^{そめや}

丘^{おか}高等学校、国際基督教大学教養学部人文科学科卒業

国際基督教大学教会勤務を経て結婚

夫 晶(あきら)



キリスト集会へのご案内

吉祥寺キリスト集会

【電話】 0422-21-8450 (集会所)
東京都 武蔵野市 吉祥寺 本町 4-9-11
〒180-0004

日曜礼拝・福音集会 10:30 / 18:30

火曜学び会 11:00

木曜祈り会 19:00

子供日曜学校 9:30

中高生日曜クラス 9:30

【バス】 ご利用の方は、吉祥寺駅北口バスのりば
「1番のりば」「2番のりば」より乗車して
「北町一丁目」で下車してください。



牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。

いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会議も、会則もありません。

みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によりこびをもつてなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものではありません。

出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらさげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。

あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。

礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

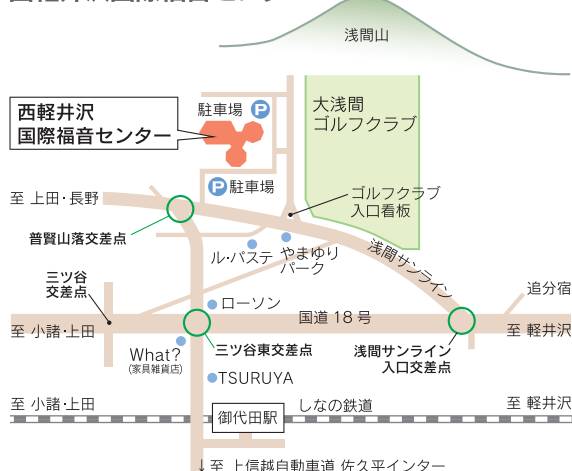
家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。

快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
【電話】 0267-32-6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450-15 〒389-0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
【電話】 0267-32-6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450-33 〒389-0201

アクセス

【鉄道】

しなの鉄道で御代田駅下車。
タクシーで 約5分 (1000 円程度)
徒歩 約45分 = 3 Km

御代田駅へは東京駅より
北陸新幹線にて軽井沢駅下車、
しなの鉄道に乗り換えて三つ目
御代田駅で下車。

【車】

上信越自動車道
佐久平インター下車 約20分 (約7km)
■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。



モーセの十戒 神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒とすることができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのことーヨハネの黙示録 (第1～4巻)

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれー私たちは主のもの

証しシリーズ (第1～9集)

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

実を結ぶ命 がんのうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そここのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



絶えず祈れ (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。



■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先 〒180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町 4-9-11 吉祥寺キリスト集会

集会の出版物



主は生きておられる 第65号

定価100円（税込み）2025年2月21日発行

編集スタッフ	岩本秀造 黒澤錬二 鈴木力
	芳我幸雄 福留伸子 牧野正士
写真	鈴木力 芳我幸雄
印刷・制作	ニューライフ・ミニストリーズ 新生宣教団
題字デザイン	飯守格太郎
発行所	キリスト集会

キリスト集会のホームページ <http://christ-shukai.net/>

出版本を購入されたい方、お問い合わせ webmaster@christ-shukai.net

また、キリスト集会のホームページの「出版物」のサイトからもメールにてお問い合わせが可能です。